



Title	成化本『白兔記』譯註稿（一）
Author(s)	小林, 春代; 高橋, 文治; 谷口, 高志 他
Citation	中国研究集刊. 2003, 32, p. 52-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

成化本『白兔記』譯註稿(一)

加藤 聰 小林春代 高橋文治 谷口高志
 富永鉄平 西尾 俊 藤原祐子 森下久美子

本稿は、一九六七年に嘉定縣の墳墓から發見され、南戲現存最古の版本として知られる成化本『白兔記』に、詞曲部分の押韻についてのコメント、諸テキスト間の文字の異同の校記、註釋および和譯を施したものである(本稿においては第五出途中まで)。成化本『白兔記』の校註本については、俞爲民『明成化本「劉知遠還鄉白兔記」校註』(『藝術研究』第三輯(總一二輯)、浙江省藝術研究所、一九八五。以下「俞本」と略す)が既に刊行されており、本稿においてもこれを適宜参照した。

○本文中の誤字ないし衍字は()で示し、校定字、脱字を「」で示した(文字の異同や校訂に関わることは、田において適宜言及する)。字體は印刷の都合により原則として正字體に統一し、いわゆる「おどり字」は、適宜文字を補っ

て表記するものとする。また、「□」は原文中の原缺字もしくは磨滅字、「二」は印刷上表示が不可能な訛字である。

○原文中の「白」「唱」の標記やト書きなどは、便宜的に四角圍みで表示した。○底本には各出の區切りの表示がないため、本稿では便宜上これを補った。○詞曲の本

文は、その格律により句型を定め、押韻句は句號(。)、非

押韻句は頓號(、)によって斷句を施した。また、詞曲には出ごとにアラビア數字による通し番號を附し、参照の便宜に供した。○田には、詞曲についてのみ、その脚韻を、

清・沈乘磨『韻學驪珠』に従って、平上去聲二韻(東同、江陽、支思、機微、歸回、居魚、蘇模、皆來、眞文、干寒、歡桓、天田、蕭豪、歌羅、家麻、車蛇、庚亨、鳩侯、侵尋、監咸、織廉)、入聲八韻(屋讀、恤律、質直、拍陌、約略、

多くが「副末開場」と題する。その他、清・黃旛綽「梨園原」論
戲統」の條にも關聯記事がある(次項「滿庭芳」の註參照)。翁敏
華「副末開場」與中國古代戲劇觀的演進」(『中華戲曲』第四輯、
山西人民出版社、一九八七)參照。なお、「開」字は『元刊本元雜
劇三十種』のト書き部分にしばしば用いられ、その意味は必ずし
も明らかではないが、ここでは、開場、の意。○「滿庭芳」
―既に兪本がこれを補う。清・黃旛綽「梨園原」論戲統」に「古
時の戲、始め一たび鬼門道を出ずれば、必ず先ず紅芍藥一詞を唱
うは、何ぞや。……古製に云わく「太子千秋歲、春園畫錦堂。一
株紅芍藥、開遍滿庭芳」と。其の曲牌名を取りて引口詞と爲すな
り」とある。ここにいう「千秋歲」「畫錦堂」「紅芍藥」「滿庭芳」
は詞牌であり、それらが「副末開場」で用いられることをいうの
である。成化本『白兔記』第一出においては、この後に「紅芍藥」
【滿庭芳】が用いられており、副末の登場詩と「紅芍藥」にはさまれ
た本部分も韻文であつて、【滿庭芳】とするべきであらう。ただし、
後關については必ずしも格律に合わない。○越築班眞幸―
「班」を、劇團、の意と解し、全體を、越築の守護神、といった
意に解釋した。本劇は後文に「永嘉書會才人」とあるように、永
嘉の書會で書かれたものである。つまりここにいう「越築」は永
嘉の書會を指し、「眞幸(主催者)」はその守り神。なお、明清の
時代になると、劇團の守護神は二郎神と考えられていたようであ
り、そのことについては王兆乾「戲曲祖神二郎神考」(『中華戲

曲』第二輯、山西人民出版社、一九八六)參照。ただし、ここに
いう「眞幸」が二郎神を指すかどうかは不明。○白舌入地府
赤口上青天―「赤口」「白舌」ともに争いをひき起こす惡神をい
う。『水滸傳』第七回到「只聽得門外老鴉哇哇的叫、衆人有叩齒
的、齊道「赤口上天、白舌入地」とある。(宋元)參照。○
三巡―「三獻(神に三度酒を奉じること)」と同意であらう。
○六儀―「六贊」「六擊」(ともに、さまざまなお供えと同意で
あらう。○化眞金錢―待考。本物の金錢を焼く、という意味
は形成するが、ここでは、本詞が【滿庭芳】の格律から見て數句缺
けていると思われるので、「化」の後に一行の脱落があると考
えて譯した。○擲(擲)斷―「斷送」と同じで、演奏する、の
意。(匯)參照。『張協狀元』第二出冒頭にも、副末(脚色名は「生」
となつている)が【獨影搖紅】の「斷送」を命じるシーンがある。
○「紅芍藥」―詞牌。前【滿庭芳】註參照。ただし、本曲は【紅芍
藥】の格律に合わない。「哩囉連、囉囉哩」は一種のスキヤットで、
もとは佛曲によるといひ、宋金以來、俗曲や戲曲文學にしばしば
用いられた。饒宗頤『明本潮州戲文五種』說略」(『明本潮州戲
文五種』、廣東人民出版社、一九八五)參照。潮州戲文『金釵記』
第四出(劉念茲校註本、廣東人民出版社、一九八五)等にも一曲す
べてが「哩囉連云々」で構成された曲があるが、それらは曲律に
したがつて押韻しており、ここも當然押韻すべきだと考えられる。
しかし、本テキストの文字遣いではそうはならない。前述の饒宗

頤『明本潮州戲文五種』説略」は、本「紅芍薬」を引用し断句しているから、断句はひとまずそれに従った。 ○〔滿庭芳〕一

「山莫」から「黄昏」までは、秦觀「滿庭芳」詞をかなり忠實に襲うため、詞牌名を補った。また、原文のまま意味が通じない文字に關しては同詞によって改め、譯も同詞の意に沿って解した。

秦觀「滿庭芳」詞は以下の通り。「山抹微雲。天粘衰草，畫角聲斷誰門。暫停征棹，聊共飲離尊。多少蓬萊舊事，空回首煙霧紛紛。斜陽外，寒鴉數點，流水遶孤村。銷魂。當此際，香囊暗解，羅帶輕分。謾贏得，秦樓薄倖名存。此去何時見也，襟袖上空染啼痕。傷情處，高城望斷，燈火已黃昏」（『唐宋諸賢絕妙詞選』卷四）。この詞はかなり人口に膾炙していたと思われる、元曲等にもしばしば引用されるほか、筆記・詞話等にも、たとえば宋・葉夢得『避暑錄話』巻下が「『山抹微雲。天粘衰草』は尤も當時の傳うる所と爲る」といい、宋・吳曾『能改齋漫錄』巻一六「黃魯直詞謂之著腔詩」の條が「斜陽外，寒鴉萬點，流水遶孤村」の如きは、字を識らざる人と雖も、亦た是れ天生の好言語たるを知る」という。

○站聽□□□□□□□□——本テキストにおいては、缺字は四字分しかないように思われるが、格律からいえば五字分必要だと思われるため、空格を一字分補った。 ○暗結——「結」を秦觀詞では「解」に作る。「結」と「解」を同音字として誤ったとすれば、本テキストにおいては入聲音は消失する方向にあり、また『中原音韻』とも異なった音韻體系にしていることに

なるだろう。 ○冷〔嬴〕——古屋昭弘「明・成化本『劉知遠還

鄉白兔記』の言語」(『中國文學研究』一三、早稻田大學中國文學會、一九八七)は、「冷」を「吟」の誤字とし、「吟」が「嬴」と混同されたものとする。これに従う。

譯

〔宋に扮して登場し、開場して言〕詩に曰く國が正しければ天は喜び、役人が清廉であれば民は安らぐ。妻が賢ければ夫のわざわいは少なく、子が親孝行ならば父は安心する。

1【滿庭芳】太平を祝い、人々は仕事を樂しみ、歌うは豊作のよろこび。風の香りが芳しく、めでたい霞が立ち込める。越樂の劇團の神様をお招きし、神の乗りものをお迎えして、急いで宴の席に赴いていただきましょう。今宵ばかりは、白舌は地中に潜り、赤口は空へ行つて悪い神は立ち去れ。 神に三獻の杯を捧げてさまざまなお供えをして、焼く……(本物の金銭)。一齊に音樂を演奏して、天まで響くほどに打樂器を鳴らし、音樂の神様をお見送りいたしましょう。

2【紅芍薬】〔宋のうた〕リーラーレン、ラーラーリー。レンリーレン、ラーレンリーレン、ラーラーレン、ラーラーレン、ラーレンラーレン、リーレンラーレン、ラー……ラー、リーレンラー、

リーラーリー。

3【滿庭芳】宋が言う薄雲は山をはらって飛び、枯草は天際まで續き、望樓では日没を知らせる角笛の音が途絶えた。

しばし旅の舟をとどめ、共に別れの杯を酌み交す。数々の歡樂の思い出、振り返ったところで霞の中。夕陽の彼方、寒空に烏が數羽、川はぼつりと寂しい村里をめぐり流れる。

魂も消え入らんばかり。別れの時、香り袋をそっと結び、薄絹の帯を分かつて別れゆく。手に入れたのは、色街の浮氣男の評判だけ。この後いつまた會えるのか、襟袖は涙に染まるばかり。悲しいのは、高い城壁から眺めやると、もう燈りがともりたそがれ時になつてしまったこと。

惜竹不雕當路筍、愛松不斬橫穢(生)枝。不是英雄不贈劍、不是才人不賦詩。

今日(利)「(辰)」家子弟搬演一本傳奇。不插科、不打(問)「(譚)」、不爲之傳奇。倘或中間字(藉)「(迹)」差訛、馬音等字、香談別字、其腔列調中、間有同名同字、萬望衆位、做一床錦被遮蓋。天色非早、而即晚了也。不須多道(撒)「(散)」說。借問後行子弟、戲文搬下不曾。(丙)應搬下多時了也。(宋)白(計)「(既)」然搬下、搬的那本傳奇、何家故事。(丙)應搬的是李三娘麻地捧印、劉知遠衣錦還鄉白兔記。(宋)白好本傳奇。這

本傳奇虧了誰。(丙)應虧了永嘉書會才人。(宋)白在此燈

窗之下、磨得墨濃、(斬)「(蘸)」得筆飽、編成此一本上等孝義故事。果爲是千度看來千度好、一番搬演一番新。不須多

道散說、我將正傳家門念過一遍、便見戲文大義。怎見得、4【滿庭芳】五代殘唐。漢劉知遠、生時紫霧神光。李家莊上、招贅作東床。二舅不容完聚、使機謀折(拆)散鸞凰。分飛去、知遠投充邊塞、看他武藝高強。岳節使把

秀英小姐、匹配鸞凰。三娘受苦、磨坊中、生下咬臍郎。年長一十六歲、因打獵實認親娘。後來加官(爵)、直做到九州安撫、衣錦喜還鄉。

【詩】剪燭生光彩、開筵列(倚)「(綺)」羅。來是劉知遠、(啞)「(雅)」靜看如何。【

韻】江陽韻。

【校記】汲本、風本。○【滿庭芳】諸本「滿庭芳」○「生時紫

霧神光」汲本「生時紫霧紅光」、風本「時紫□□□」○「莊」風本「□」○「作」風本「五」○「二」風本「二」

○「使機謀折散鸞凰」汲本「生巧計拆散鴛行」、風本「心生巧計拆散鴛戶」○「分飛去……生下咬臍郎」汲本「三娘受苦、產

下咬臍郎。知遠投軍、卒發跡到邊疆、得遇繡英岳氏、願配與鸞凰」、風本「三娘受苦、磨坊下生咬臍郎。知遠□□、卒發跡到邊疆、□

□秀美岳氏、配與鸞凰」○「年長一十六歲」汲本「二十六歲、

咬臍生長」風本「二十六口、咬臍生長」

汲本「因出獵識認」、風本「口遊獵識認」

○「後來加官嘯直做到九州安撫、衣錦還鄉」汲本「知遠加官進職、九州安撫、衣錦還鄉」、風本「知遠如官進職、九州安撫、昏帛還鄉」

註 ○借竹不雕當路筍……以下四句は七言の韻文だと思われる

ので、段を分かつ。二句目の「横」は誤りであると考えられるので、假に改めた。「不是英雄不贈劍、不是才人不賦詩」はおそらく成語的な表現で、『五代史平話』『周史平話』(七)にも「俗語云『酒逢知己飲、詩向會人吟』」という類似表現がある。なお、ここに「才人」というのは書會の人をいい、「不是英雄不贈劍、不是才人不賦詩」の二句は、秦觀「滿庭芳」詞を受け、書會の才人でなければ多情の詞をつくらず、「その場に居合わせるお客様のよくな方々でなければ、その多情の詞を理解しない」といった内容を述べるものと思われる。

○(利)「戻」家子弟『太和正音譜』卷上「雜戲十二科」の條に「子弟趙先生曰く『良家の子弟、扮する所の雜劇、之を行家生活(ワロの仕事)と謂い、娼優の扮する所の者、之を戻家把戲(アママのたむれ)と謂う。良人は其の恥を貴び、故に扮する者は寡なく、今少しなし。反つて娼優の扮する者を以て、之を行家と謂う』と」とある。「戻家」はアマチュアをいう。「子弟」は、「樂人」「伶人」を指す。(宋元参照) ○不插科不打(問)「諱」―俞本が既に「問」を「諱」に改めている。

第一出の「副末開場」において、滑稽な仕草やせりふが劇中にふ

んだんに取り入れられていることを言う例としては、『張協狀元』等がある。

○馬音等字香談別字―待考。この八字が何をいうかわからない。ここでは「馬」を「罵」、「等」を「奪」、「香」を「巷」の誤字として假に譯した。

○同名同字―具體的に何をいうか未詳。ここでは假に、観客の中に劇中人物と同姓同名の人がいることを憚つていうものと考えて譯した。

○做一床錦被遮蓋―潮州戲文『金釵記』第一出の「副末開場」にも「做成幔天錦帳、口口望遮欄」とある。おそらく同様のことをいうのである。

○撒(散)説―「撒説」は用例を見ないので、改めた。「散説」は適當に言うこと。

○後行子弟―樂人・伶人は列を作つて並び演奏するのでこのようにいう。妓女の長をいう「行首」もこの種の語。

○搬下―未詳。「搬」は一般的には「搬演(上演する)」の意。ここでは、おさらい、の意と解した。

○(内)應―文脈から、舞台上と奥との對話と考へて補つた。以下同。

○李三娘麻地捧印劉知遠衣錦還郷白兔記―元曲にも同様の題目があり、『錄鬼簿』『劉唐卿』の條に「李三娘麻地捧印」といい、『大和正音譜』『劉唐卿』の條にも「麻地傍印」とある。また、成化本「白兔記」第四五葉bでも「這

箇是李三娘麻地捧印、劉知遠衣錦還郷」といい、本劇そのものが元曲の改作であることを濃厚に感じさせる。「印」は、劉知遠が

九州按撫使を拜命した證明としての印璽であり、實質的には金牌を指す。なお「白兔記」という題目名が登場するのは成化本が最

初であり、「白兔引路」の情節が明代になってから生じた可能性も否定できない。

○永嘉書會才人——張協狀元——「九山（永嘉の地名）書會」の編であると第二出に明記されており、また「琵琶記」の作者と目される高明も永嘉の人である。なお「書會」は、宋元時代の劇團・話本等の製作者集團をいう。『武林舊事』卷六參照。「才人」は、書會に所屬する人たち。（宋元）參照。○在此——「此」は文意より衍字と考えた。○千度看來千度好

一番搬演一番新——紫雲亭「第四折【鷓鴣天】に「一度搬著一度新」とあり、劇團の常套句と思われる。○家門——李漁『閑情偶寄』に「開場の數語、之を家門と謂う」という。「家門」はもともと、商賈、のような意だが、ここでは劇團の口上・概略をいう。

○【滿庭芳】——汲本に従って補う。○東床——「女婿」の意。（漢）參照。○二舅——『劉知遠諸宮調』や『五代史平話』では、李三娘には二人の兄がいることになっているが、南戲『白兔記』では兄は一人しか登場しない。ここで「二舅」というのは、語り物・小説類の情節の名残であろう。○看他武藝高強——この句は韻を踏み、かつ前關の末句であるが、意味上は「岳節使」の句に繋がっていくように思われる。

○匹配鸞鳳。三娘受苦——格律からいえば、「匹配鸞鳳」の句は不叶句、「三娘受苦」は叶韻句でなければならぬ。したがって「苦」は失韻。○磨坊——ひき臼小屋。○列（倚）綺羅——「綺羅叢」と同意。「綺羅叢」は男女を問わずいい、きらびやかな人たち、といった意。柳永「樂

章集」卷上「女冠子（斷雲殘雨）詞に「綺羅叢裏、有人人、那回飲散、略曾借鴛侶」とある。

譯

竹を借しんでは道をふさぐ筈も切らず、松を借しんでは餘計な枝も切らない。相手が英雄でなければ劍を贈らず、書會の才人でなければ多情の詩も作らない。

さて今日は、素人藝人達が一本の傳奇を上演いたします。滑稽なしぐさやおどけたセリフがなければ、芝居にはなりません。もし脚本の中に罵り言葉や脱字、下卑た言葉や言い間違いがあったり、また、歌の中にお客様と同姓同名がありましても、皆さまには錦の布團で覆い隠して、氣にしないでいただくようお願いいたします。時間も早くありませんし、まもなく日も暮れます。つまらぬ話はやめにしましょう。裏の役者達に聞くが、脚本のおさらいはしたか。〔丙で應じる〕充分してあります。〔宋のセリフ〕おさらいが出来ているのならば、これから上演するのは何のお芝居で、どこの家のお話か。〔丙で應じる〕李三娘、麻畑にて金牌を受け、劉知遠は故郷に錦を飾る白兔記』を演じます。〔宋のセリフ〕素晴らしい物語だ。この脚本は誰の手になるのか。〔丙で應じる〕永嘉の書會の才人たちです。

〔宋のセリフ〕燈火の窗邊に墨をすり、筆をひたして、この一

篇の孝義の物語を編みました。まさしく「千回見ても千回面白く、一度ごとに新しい」というもの。つまらぬ話はこのままで。この物語の概略を申しあげ、本劇の大義を示しましょう。いかにといへば、

4【滿庭芳】唐の終わりから五代の時代。漢の劉知遠は、生まれる時に紫の靈氣をまといました。李家の村で、入り婿になりました。二人の義兄が一家の團樂を許さず、からくりを使って夫婦を離散させました。夫婦は離れ離れになり、劉知遠は邊境のとりでに身を寄せ、彼の優れた武藝を見て、岳節度使は娘の秀英嬢を、妻として娶せました。三娘は辛酸を舐め、磨坊のなかで、咬臍郎を産みました。(咬臍郎が)十六歳となり、狩に出て母親と親子の名乗りをあげました。その後劉知遠は官爵を受け、九州安撫使となつて、故郷に錦をかざります。

詩に曰く 蠟燭の芯を切つてあたりは明るく、居並ぶのはきらびやかな方々。登場いたしますのは劉知遠、みなさまお静かにご覧ください。[週場]

第二出(生(劉知遠)、末(史弘肇)、淨(史の妻))

[生上]

1【獅子序】年乖時蹇、(往)(枉)有冲天氣宇、受無限嗟吁。最好似堂堂七尺身軀。不如我一擔英雄俊傑、俊傑問天道五行何如。似(虎)(餓)虎在巖前睡也、困龍失卻了明珠。

[生] 結交須結英與豪。莫結區區兒女曹。(朕)(眞)此謂也。自家姓劉、名臯(曷)、雙名知遠。不幸幼年失父、隨母改嫁、只因我好賢學武、壞了我潑天家計、(口)(至)被繼父趕逐在外、不容知遠回家。日間在賭博場中搜求貫伯、夜宿在馬鳴王廟中。是此雪寒天氣。但見滾滾飄綿、層層銀砌。門前過客箇箇失路迷蹤、江山(上)漁翁兩兩披蓑(挾)(拽)(二)(棹)。凍合玉樓寒(氣疎)(起粟)、光遙(搖)銀海遍生花。似此雪寒天氣、不見故人一面。怪他不的落在貧窘之中、有誰人探我。好(大)雪(也)。

2【疎影】(絳都春犯)[生] 形雪(布密)(密佈)。見四野、盡是瓊粧銀砌。(墮)(迸)玉篩珠。只見柳絮梨花在那空中舞。長安酒價爭高沽。見漁父披蓑歸去。(末)[生] 鼻中、只聞的梅花香。(遙)(要)見並(舞)(無)(在)(密)(覓)處。[生] 3【換頭】看覷。青山頓老、見過往行人、迷蹤失路。下幕垂簾、(酌酒)(酒酌)羊羔歌白紵。紅爐添炭人完聚。怎知道怎知道街頭上貧苦。[生]

顯 居魚、機微韻。

【校記】 1—汲本、始譜、成譜、新譜。 ○【獅子序】汲本【絳都春引】、成譜【絳都春】 ○【時】諸本「運」 ○【往】諸本「枉」

○「受無限嗟吁。最好似堂堂七尺身軀」汲本·始譜·成譜「最苦堂堂七尺軀。受無限嗟吁」、新譜「受無限嗟吁。最苦是七尺軀」

○「不如我一擔英雄俊傑、俊傑問天道五行何如」汲本·成譜、無

○「不如」始譜·新譜「爭似」 ○「一擔英雄」始譜·新譜「英雄」 ○「俊傑問」始譜·新譜「問」 ○「似」始譜·成譜·新譜「似」 ○「老虎」諸本「餓虎」 ○「在」諸本、無

○「了」諸本、無

2—汲本、風本、始譜、成譜、京譜、吳本、響本、醉本、三本。

○【疎影】汲本·風本·京譜·吳本【絳都春】、始譜【絳都春犯】、成譜·響本·醉本·三本【絳都春序】 ○「形」始譜「同」 ○「布密」汲本「密佈」、醉本「佈密」 ○「瓊粧銀砌」汲本·始譜·成譜·京譜·吳本·響本·醉本·三本「銀粧玉砌」、風本「銀砌瓊銀」 ○「墀玉篩珠」汲本「迸玉篩珠、迸玉篩珠」、

風本「送玉篩」、始譜·成譜·京譜·吳本·響本·醉本·三本「迸玉篩珠」 ○「只見柳絮梨花在那空中舞」汲本·始譜·成譜·

吳本·響本·醉本·三本「只見柳絮梨花在空中舞」、風本「柳絮梨花隨風舞」、京譜「柳絮梨花空中舞」 ○「爭高沽」汲本·

風本「增高沽」、始譜·成譜·京譜·吳本·響本·醉本·三本「增高貴」 ○「漁父披簑」風本「漁扇披着簑衣」 ○「鼻」風

本「望空」 ○「只聞的梅花香」汲本·成譜「但聞得梅花香」、

風本「但聞」、始譜·新譜「只聞得梅花香」、欽譜·增譜·吳本·響本·醉本·三本「只覺梅花香」、京譜「只覺梅香」 ○「遙見並舞在密處」汲本·成譜·京譜「要見並沒覓處」、風本「要尋簡梅花、並無覓處」、始譜·欽譜·增譜·新譜·吳本·響本·醉本·三本「要見並無覓處」

3—汲本、風本、始譜、成譜、欽譜、增譜、新譜、京譜、吳本、響本、醉本、三本。 ○【換頭】汲本·京譜·吳本·響本·醉本·三本【前腔】、始譜·欽譜·增譜【換頭】、新譜【絳都春影】

○「看覷」汲本·始譜·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·吳本·響本·醉本·三本「堪覷」、風本「疑野」 ○「過往行人」風本「行人往來」、醉本「來往行人」 ○「下幕垂簾」汲本「下幕垂簾、下幕垂簾」、風本「繡幕垂簾」 ○「酌酒」風本「醉酌」、欽譜·增譜·新譜·醉本「酒酌」 ○「白紵」風本「白回」 ○「紅爐添炭人完聚」汲本·始譜·吳本·響本·三本「紅爐炭人歡聚」、風本「紅爐內添炭人歡聚」、成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本「紅爐炭人完聚」 ○「怎知道怎知道」汲本·始譜·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·吳本·響本·醉本·三本「怎知道」、風本「怎知」 ○「上」汲本·風本·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本·三本、無、始譜·吳本·響本「有」

○【獅子序】—汲本は【絳都春引】とするが、始譜は『白兔記』

註

○「上」汲本·風本·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本·三本、無、始譜·吳本·響本「有」

○「上」汲本·風本·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本·三本、無、始譜·吳本·響本「有」

○「上」汲本·風本·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本·三本、無、始譜·吳本·響本「有」

○「上」汲本·風本·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本·三本、無、始譜·吳本·響本「有」

○「上」汲本·風本·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本·三本、無、始譜·吳本·響本「有」

○「上」汲本·風本·成譜·欽譜·增譜·新譜·京譜·醉本·三本、無、始譜·吳本·響本「有」

の本曲を『獅子序』の條で引く。始譜に従った。ただし、本曲は一般の『獅子序』と格律を異にし、始譜が本曲を『獅子序』の「又一體」として引くのもそのためと思われる。また、始譜と成化本の兩者に重要な文字の異同があることは、始譜が成化本を引用したのではないこと、つまり、汲本や成化本とは異なったテキストを参照したことを推測させる。なお、『獅子序』から『絳都春犯』第二曲まではともに居魚韻であり、一套をなすものと思われる。『獅子序』『絳都春犯』は、この場合ともに黃鐘宮に屬することになるか。○年乖時蹇——「年乖時(運)蹇」は、年回りが悪く運つたないことをいう常語。○受無限嗟吁最好似堂堂七尺身軀——「最好似」三字は何らかの誤りを含むであろう。この二句はこのままでは意味をなさないと思われるので、汲本等に従って譯した。

○「擔英雄」後の第三出2「一江風」にも「一旦(擔)英雄」とあるので、誤りではないだろう。たとえば元曲などでは「一擔愁」の語も見えるので、「一擔」は量が多いことを表す量詞と思われる。○俊傑——二度目の「俊傑」は原文ではおどり字。衍字かもしれない。○(虎)餓虎——汲本・始譜等に従って校訂した。○困龍失却了明珠——「莊子」『列禦寇』に「夫れ千金の珠は、必ず九重の淵にして驪龍の頷下に在り。子の能く珠を得たる者は、必ず其の睡れるに遭えばなり」とある。これを用いたのであるろう。この典據を用いた例としては、他に黃庭堅「題落星寺」詩第二首に「驪龍莫睡失明珠」の句がある。「困龍」は、ねむれ

る龍。○結交須結英與豪莫結區區兒女曹——「豪」「曹」で押韻し、開場詩としての役割を果たしている。兩句ともに常語であろう。この二句に類似した表現として、南宋・楊冠卿「客亭類稿」卷一三「癸丑生朝舟行有感」詩に「未了詩書債、見輕兒女曹」、「所貴盡忠孝、結交英與豪」の句がある。○(口)至——口の箇所は文字の下半分が缺けているが、殘存箇所から判斷して「至」とした。なお、後の第三出1【全燕葉】の後の生のセリフに、このこと類似する表現が見られ、「止」に作る。「至」は「止」の同音による誤りではあるまいか。○貫伯——「貫巨」に同じ。錢・紙幣、

の意。○馬鳴王廟——馬明王廟。馬明王は靈神で、馬頭娘ともいう。『七修類稿』卷一九に「所謂馬頭娘なる者は、荀子蠶賦の『身は女好にして頭は馬首なる者か』との一語に本づいて付會せるなり」とある。なお「明王」とは神の通稱であり、「明」を「鳴」に作るのは誤りという。清・翟灝「通俗編」卷一九參照。以下の譯文では原文の表記に關わらず、全て「馬明王」と表記する。○江(山)——上漁翁兩兩披蓑(揆)(拽)(二)棹——汲本に従って校訂する。『全唐詩』卷三〇八張志和「漁父歌」第二首に「釣臺漁父

褐爲裘、兩兩三三舴艋舟」、元・劉詵「桂隱詩集」卷二「題彭宜遠所藏羅稚川山水樓閣圖」詩に「漁翁兩兩青簑衣」の句がある。○凍合玉樓寒(氣疎)——起粟(搖)銀海遍生花——この二句は宋・蘇軾「雪後書北臺壁」詩第二首の「凍合玉樓寒起粟、光搖銀海眩生花」を用いる。蘇軾の詩により字を改めたが、「遍生花」

はこのままで意味が通じるため、原文のままで譯した。なお、宋・

莊綽『鷄肋編』卷中に「東坡、雪の詩を作る。……人多く玉樓

銀海の事を曉らず。惟だ王文正公のみ云う『此れ道家に見ゆ、肩

と目とを謂うなり』と」とあるが、ここでは「玉樓」「銀海」の

まま譯した。○怪他不的―「怪不的」と同意。○「疎影」

〔絳都春犯〕―「疎影」のままでは曲律に合わないのので、始譜に従

つて〔絳都春犯〕に改めた。○「布密〔密佈〕―汲本に従つて「密

佈」とする。多くのテキストがなぜ「布密」に作るかよくわから

ない。○銀砌―始譜は「砌」を失韻とするが、ここでは居魚

韻と機微韻が通押していると考へた。○爭高沽―始譜等に従

つて「増高貴」とする方がよいかもれない。○〔宋上〕〔同〕―

末はここで登場するが、末と生はまだ會面していない。○只

聞的梅花香……以下二句は「不是一番寒徹骨、爭得梅花撲鼻香」

の成語（『琵琶記』第四二出など）をふまえるだろう。○「換

頭」―汲本等は「前腔」とするが、誤り。○羊羔―元・宋伯仁

『酒小史』に「汾州の乾和酒、山西の羊羔酒」とあり、また、清・

陳元龍『格致鏡原』の引く、明・黃一正『事物紺珠』にも「羊羔

酒は汾州に出だす。色は白瑩にして風味饒かなり」とある。銘酒

の代名詞。○白紵―『宋書』卷一五「樂志」(一)に、「又た

白紵舞有り。按ずるに、舞詞に巾袍の言有り。紵は本是吳地の出

だす所なれば、宜しく是れ吳の舞なるべし」とある。「白紵」は

詞牌にもみられ、ここでは宴席で歌われるうたとして用いられて

いる。

譯

生が登場してうたう

1【獅子序】運つたなく、天つく氣概もあだである。堂々たる七尺の身體をもちながら、限りない苦しみを受けている。だれも我が英雄ぶりには及ぶまいに、その英雄の運命や如何にと天に問うならば、餓えた虎が巖前に眠つて途をふさぎ、眠る龍は明珠をぬすまれ力を失っているかのよう。

〔生のセリ〕

交わりを結ぶなら英雄豪傑、くだらない女子供は相手にするな、とはよく言ったもの。我が姓は劉、名は鬻、雙名は知遠。不幸にも子供の頃に父を失い、母が再婚するのに付き従いましたが、賢者を好み武藝を學んだがために、天を衝くほどであった我が家の財産をすっかり使い果たしてしまい、義父に家の外に追い出され、家に歸することも許されない始末となりました。そんなわけで今は、晝間は賭博場で錢もうけ、夜になれば馬明王さまの廟に宿を借りているのです。それにしたつてこの雪空はひどいもの。ただ見えるのは、とめどもなく綿を散らしたかのように落ちてくる雪と一面の銀世界。門前に行く旅人は誰も彼も道に迷い、川邊にいる漁夫の

爺さんたちは連れ立って簑をかぶり棹をひいています。樓閣は凍結し、寒さのあまり鳥肌が立ってきました。銀の海に光がゆらめき、あたり一面花が咲いたかのよう。こんな雪空では友人だつて訪ねて来まい。貧乏人は誰も相手にしない、というのももっともな話です。しかしまあ、なんとひどい雪でしょう。

2【絳都春犯】匡のうた 黒々とした雲が濃く垂れ込め、周りを見回すと、一面玉の化粧に銀の世界。玉をほとばしらせ珠をふるいにかけているかのよう。雪が降っている。まるで柳絮や梨の花が空中に舞っているようだ。長安の酒の値段は争うように高くなっている。見れば漁師が簑を羽織って歸っていく。末が登場する 百喝 鼻では、梅の香りを感ずるのに、探し求めてみても梅の花は見つからない。末のうた

3【換頭】見れば、青山はにわかにな年をとつて眞つ白になり、行き來する旅人も、路を見失うほどだ。金持ちは家の中で幕を下ろしカーテンを閉じて、酒は羊羔酒を酌み交わし白紵歌を歌っている。赤く燃えるストーブに炭を足して人々は團樂している。街には貧苦の人がいることをどうして彼らは知っていようか。合唱、前に同じ

〔宋〕相識滿天下、知心有（三）（幾）人。當元前桃園中結義十

箇弟兄、卽漸消滅、止剩下我三人。那三人、大哥哥劉知遠、二哥哥郭彥（常）（威）、只我第三史弘兆（鼈）便是。我二哥哥將帶盤纏上東京求取功名、不在話下。止撇下我大哥哥劉知遠、流落在長街。似此（分分揚揚）（紛紛揚揚）下的國家祥瑞、我那哥哥身上又無穿的、口中又無喫的。我小兄弟不去看、有誰人去看。只得懷揣一貫伍伯文錢鈔、上長街尋訪我哥哥。買三盃五盞、與哥哥（捕）（補）寒、多少是好。串長街、（陌）（慕）短巷、過茶坊、不入酒肆、遠遠的人叢中、望見一箇大漢、手擎着護身龍棒。好相哥哥劉知遠。遠看不（得）（如）近看、（近）（遠）看不得分明、不免上前拜揖。（叫）（盤）大哥、作揖了。（匡）兄弟、那方到此。（宋）小兄弟（得）（特）來探望哥哥。（匡）兄弟、數次三番打攪。（宋）哥哥、無此說。當元前買命算卦、（說都）（都說）（有）腰金衣紫、架上無你衣我衣、懷中無你錢我錢。哥哥、不勞計較。（匡）兄弟、有錢的紅爐煖閣、獸炭羊羔。你我無錢的、受這等艱難。怎生是好。（宋）哥哥、你（計）（記）的（說）花開一遍、待等時來。（匡）兄弟、哎、時來、時來、我眼下過去去裏。我好（恨）（恨）也。（宋）哥哥、莫不恨我。（匡）兄弟也、男子大丈夫、自恨我無能、豈可恨他人。（宋）哥哥、不恨我、恨誰。（匡）兄弟、聽我說。

〔註〕○相識滿天下知心有（三）（幾）人一（成語）。元刊本『事林廣記』

「人事類」「結交警語」に「相識滿天下、知心能幾人」とある。

○當元前―用例を見ない語であるが、誤字ではあるまい。恐らく「當初」ないし「當元」と同意。 ○卽漸―二字で一語であり、しだいに、の意。雙聲語。 ○止只―後の第五出「夜行船」に

續く生のセリフにも同じ表現が見られる。このままで恐らく誤りではない。 ○串長街―「串」は「穿」の意。兩字はしばしば通用される。 ○陌〔驀〕―「陌」は「穿」の音通から来る借

字。「驀」は、歩く・越える、の意。(變)〔宋元參照〕 ○遠看不〔得〕〔如〕近看〔近〕〔遠〕看不得分明―汲本に「遠觀不審、近觀分明」とあるほか、『西遊記』第二七回にも「眞箇是遠看未實、

近看分明」の語がある。これに従って「遠くから見たのではわからない、近くから見れば明らかだ」の意になるよう校訂して譯した。 ○那方到此―「從那里來」の意。 ○〔得〕〔特〕來探望

哥哥―汲本に「小弟見天氣寒冷、特來尋兄」とあるのに従った。

○〔說都〕〔都說〕〔有〕―「說都有」を「都說」と校訂したが、「說都有〔時來〕、腰金衣紫〔必ずや運の向くときがあり、腰に金牌を下げ紫の衣を身にまとう、という〕とすべきかもしれない。

○腰金衣紫―常語。出世して腰に金牌を下げ紫の衣を身にまとうこと。 ○架上無你衣我衣懷中無你錢我錢―常語。『張協狀元』

第一二出に同様の表現があり、既に錢南楊氏が考證している(『永樂大典戲文三種校註』中華書局、一九七九)。 ○獸炭―炭を粉にして獸の形に作ったもの。『醒世恆言』「劉小官雌雄兄弟」に

「王孫綺席倒金尊、美女紅爐添獸炭」とある。(漢參照) ○

〔討〕〔記〕的〔說〕―「記的說」は、……というのを覚えておけ、の意。『金瓶梅詞話』第五二回に「你記的說、接客千箇、情在一人」とある。

譯

〔宋のセリフ〕知り合いは天下に満ちているのに、親友は何人いるだろうか。初め、桃園で兄弟の契りを結んだ十人も、だんだんと減って行き、わずかに我ら三人が残っただけ。その三人とは、一番上の兄貴が劉知遠、二番目の兄貴が郭彥威、この私が三番目の史弘肇であります。二番目の兄貴が旅費を攜えて出世を求めて東京に行ったことはいとして、残された一番上の兄貴の劉知遠は大通りをさまよっています。このようにはらはらと國家の瑞祥たる雪が降っている中、その兄貴の身體には着るものも無く、口には食べるものもありません。弟の私が様子を見に行かなければ、誰が様子を見に行くのでしょうか。一貫五百文の札を懷に押し込んで、大通りに兄貴を訪ねることといたしましょう。四、五杯の酒を買って、兄貴をあたためてあげるのが善策というもの。大通りを抜け、裏道を抜け、茶房を通り過ぎ、飲み屋にも入らずに行く、遠くの人だからの中に一人の大男が見え、手には護

身用の龍の飾りが付いた棒を持っています。どうも兄貴

の劉知遠のようです。遠くから見るよりも近くから見た方が良いでしょう。遠くからでははっきり見えないことですし。進み出てちゃんと挨拶しましょう。〔ひと聲叫ぶ〕兄貴、こんにちは。〔互のセリ〕弟よ、どうしてここにいらっしゃるんだい。〔采のセリ〕わざわざ兄貴のご機嫌伺いに参りました。

〔互のセリ〕弟よ、いつも迷惑を掛けているなあ。〔采のセリ〕兄貴、とんでもない。以前占いでは、腰に金牌をさげ、紫の衣を身にまとうようになると言われたのに、衣紋掛けには衣がなく、懐にはお金もありません。兄貴あれこれ考えないでください。〔互のセリ〕弟よ、金持ちはあたたかい部屋で炬燵をつかい、旨酒を飲んでいるのに、我々のような貧乏人は、こんな辛い目に遭っている。いったいどうしたものだらう。〔采のセリ〕兄貴、「花は時さえ来れば一度に咲く」とよく言うでしょう。〔互のセリ〕弟よ、

ああ、時さえ来れば、時さえ来ればと言うが、私はこの今が生活してゆけないんだ。ああ恨めしい。〔采のセリ〕兄貴、私が恨めしいのですか。〔互のセリ〕弟よ、大の男たるもの、己の無能を恨みこそすれ、なぜ人を恨んだりしようか。〔采のセリ〕兄貴、私を恨まずして、誰を恨むというのですか。〔互のセリ〕弟よ、まあ聞け。

4【皂羅袍】〔互〕自恨我一身無奈。

〔采〕哥哥、無奈無奈、奔波勞力、驅馳了哥哥。〔互〕兄弟也論奔波勞力、受盡連災。

〔采〕哥哥、你通文通武。〔互〕

兄弟通文通武兩兼界。

〔采〕哥哥、你目今上却如何。〔互〕

目今怎生將來賣。〔采〕朝無依倚、交我怎生布擺。夜無衾蓋。

交我怎生布擺。日長夜永交我愁無奈。〔采〕

5【前腔】哥哥且把愁腸寬解。

〔互〕兄弟也、寬解寬解、一日過不的一日。〔采〕哥哥、

上背〔輩〕古人也受如此。〔互〕兄弟也、那箇古人似

我劉知遠受這等艱難苦楚。〔采〕哥哥、你聽我說。〔互〕

論韓信乞食、〔瓢〕〔漂〕母寧奈。有朝一日運通泰。男兒漢勇

略〔中〕〔終〕須在。〔采〕

〔互〕皆來韻。

〔校〕汲本、風本、吳本、響本、醉本。○「我一身」汲本・吳

本・響本・醉本「一身」○「兄弟也論奔波勞力」汲本・吳本・

響本・醉本「論奔波勞役」、風本「嘆奔波勞役」○「兄弟通

文通武兩兼界」汲本・吳本・響本・醉本「通文會武兩應趁」、風

本「通文通武兩兼旺」○「目今怎生」汲本・吳本・響本・醉

本「目今怎得」、風本「自今怎生」○「交我怎生布擺。夜無

衾蓋、交我怎生布擺」汲本・吳本・響本・醉本「怎生佈擺。夜無衾蓋。怎生擺劃」、風本「夜無衾蓋。家筵湯費、怎生布擺」

○「夜永」風本「晝永」 ○「交我愁無奈」諸本「愁無奈」

○「前腔」汲本・吳本・響本・醉本「前腔」 ○「哥哥且把愁腸寬解」汲本・吳本・響本・醉本「勸你寬心寧耐」、風本「勸你寬心寧耐」 ○「瓢母寧奈」汲本・吳本・響本・醉本「漂母堪哀」、

風本「漂母也只忍耐」 ○「有」汲本・吳本・響本・醉本「忍」

○「運」風本「命」 ○「男兒漢勇略」諸本「男兒志氣」

○「中」諸本「終」 ○「在」吳本・響本「待」 ○「合韻」汲本・吳本・響本・醉本「合」那時腰金衣紫、日轉九階。一朝榮

貴、名揚四海。那時節驪馬高車載」、風本「合」腰金衣紫、日轉九街。一朝榮貴、名揚四海。那時驪馬高車載」

註 ○「運災」頓折(挫折する)の意。『張協狀元』第三三出の退場詩に「久留惟恐惹運災」とある。(漢)参照。 ○兼界一兼備、の意であらう。「界」は韻字なので、恐らく誤字ではない。

○「前腔」一汲本等に從い、補った。 ○論韓信乞食(瓢(漂母寧奈一韓信が洗濯女に食べ物をめぐんでもらう話は、『史記』

卷九二「淮陰侯列傳」に記述されるほか、戯曲文學では『元刊本元雜劇三十種・追韓信』第一折、南戲『千金記』第六出「推食」

等でも描かれる。なお、この二句は句格からして「食」で斷句せざるを得ないが、意味の上では「論韓信、乞食漂母、寧奈」とす

べきであらう。

譯

4【皂羅袍】(注のうた) 恨むは我が一身を如何ともし難いと。

宋のセリフ 兄貴、どうしようもない、どうしようもないと言うばかりで、兄貴をあれこれ苦勞させ、驅けずり回らせておられます。(注のうた)

弟よあれこれ苦勞し驅けずり回って、苦難の限りをなめている。

宋のセリフ 兄貴、兄貴は文武兩道に長けていらっしゃる。(注のうた)

弟や文武兩道に長けてはいるが、

宋のセリフ 兄貴、今の暮しむきはいかがでしょう。(注のうた)

今の世は自分を賣りこみにいくことさえままならない。合 朝は頼るものとしてなく、わが身をいかに取り計らったらいものか。夜は布圍さえなく、わが身をいかに取り計らったらいものか。日はながく夜もながくわが憂いをどうすることもできない。(宋のうた)

5【前腔】兄貴心配しなざるな。(注のセリフ) 弟よ、心配しなざるな心配しなざるなと言

われても、一日ごとに暮らしむきが悪くなる。(宋のセリフ) 兄貴、昔の人も同様の苦勞をいたしました。(注の

〔セリ〕弟よ、昔の人のいった誰が、この劉知遠の
ように辛い目にあつたというのだ。〔宋のセリ〕兄貴、
わたしのいうのをお聞きください。〔宋のうた〕

かの韓信を論ずれば、洗濯女に物乞いをして耐え忍んだ。
ある日運さえ開ければ、男子の胸にある雄略はきつと遂
げられよう。〔合唱、前に同じ〕

6〔玉抱肚〕〔匡〕凌雲(毫)〔豪〕氣。恨時乖難使運至。鎗刀上
刀鎗上顯成功(籍)〔績〕。此是我等之(口)〔輩〕。〔固〕腰金衣紫
知他是何日。想蒼天不負虧不負虧。〔宋〕

7〔前腔〕伊休過慮。論功名終須有日。待時來人家榮貴。
青史上管取名題。〔固〕

〔副〕機微、支思、居魚韻。

〔校記〕風本。○〔玉抱肚〕風本〔玉抱肚〕。○〔使〕風本〔施〕

○〔鎗刀上刀鎗上顯成功績〕風本〔鎗刀下建功成績〕。○〔口〕

風本〔輩〕。○〔不負虧不負虧〕風本〔不負虧〕。○〔過〕

風本〔掛〕。○〔論〕風本〔平〕。○〔待時來人家榮貴〕風

本〔待口大家〕。○〔青史上管取名題〕風本〔青史管取姓名題〕

〔註〕○鎗刀上刀鎗上―このままで意味が通じると思われるので、

校訂はしなかった。○〔口〕〔輩〕―風本に従って補った。

○想蒼天不負虧不負虧―二度目の「不負虧」は原文ではおとり字。

ここは句格からいえば七字句で、襯字がどれか判然としないが、
校訂する決め手に缺くためこのままとした。○〔前腔〕―格

律に従い、補った。○伊―ここでは二人稱。○休―禁止
命令。「不得」と同意。○管取―きつと・必ず、の意。「取」
は語助。

〔註〕

6〔玉抱肚〕〔匡のうた〕雲をも凌ぐ豪氣をもちながら、時にめ
ぐまらず運をたぐりよせる術もないのが恨めしい。槍と
刀で手柄を立てる、それがわれら武人というものである
のに。〔固〕腰に金牌をさげ紫の衣を身にまとうのはいつ
のことやら。思うに天はわれらを裏切るまい裏切るまい。

〔宋のうた〕

7〔前腔〕兄貴心配なさるな。いつかかならず功名は遂げ
られよう。時さえ来れば榮達し、史書にその名を残すだ
ろう。〔合唱、前に同じ〕

〔宋〕哥哥、兄弟(口)〔懷〕〔揣〕一貫五伯文錢鈔、買酒不
醉、買飯不飽。兄弟家中有瓶(酌)〔濁〕醪、哥哥能飲盡醉方
〔歸〕。你到兄弟家中走遭。〔固〕兄弟也、我不去了。數次
三番打攪定害。〔宋〕哥哥、無此說。請行。串長街、〔防〕〔陌〕
短巷、過茶(打)〔坊〕、不入酒肆、轉灣(摸脚)〔抹角〕、這里
便是。哥哥少待。等兄弟叫出婢媳婦、與哥哥相見。〔固〕

大嫂、大嫂。〔淨〕老娘忙里。〔末〕你做甚麼。〔淨〕老娘尺人鍋裏。〔二〕〔洗〕脚里。〔末〕你那脚盆里。〔成〕盛着登年飯里。〔末〕〔淨〕白 吓吓、你好沒上夫。〔下〕。〔末〕大嫂有請。劉伯伯在此。請相見。〔淨〕劉伯伯在此、老娘越發忙了。老娘在此這里穿褲子忙里。〔末〕莫得〔庄腰〕〔粧么〕。〔淨〕〔淨〕白 丫頭也、端的馬子來。撒一泡尿出去。〔末〕你好出〔嗅〕〔臭〕。請行。

〔註〕○〔歸〕―〔歸〕は元來脫字であるが、汲本に従つてこれを補つた。○定書―「打攪」と同意。〔末〕參照。○尺人―未詳。ここでは「尺」を「借」の誤字だと考へて譯した。○〔二〕〔洗〕脚里―「洗」は原文では訛字。前後の展開から、假に「洗」字を補う。○〔成〕〔盛〕着登年飯―未詳。ここでは「登年飯」を「陳飯」の意として譯した。○〔末〕〔淨〕白―前後の展開から改めた。○沒上〔夫〕〔下〕―原文のままでは意味が通じないため、假に校訂した。「沒上下」は、ものの上下をさきまえない、の意。○伯伯―同世代の年長者に對する呼稱。○在此這里―「這里」は衍字かもしれない。○莫得―「不得」と同意。禁止命令。○〔庄腰〕〔粧么〕―「粧么」は、格好をつける、の意。〔末〕參照。○馬子―桶。ここでは、便器。おまゝの意。「馬桶」ともいう。○出〔嗅〕〔臭〕―「馬子」を使うので、「臭」と「出丑」とがかけてある。○請行―汲本は

「請快來」とする。「請行」は成化本に類見される表現で、恐らく、さあさあ、といった程の意。

〔譯〕〔末のセリ〕 兄貴、私は懷に一貫五百文の札を押し込んできました、これでは酒を買つても酔えず、飯を買つても腹一杯になりません。私の家に濁酒がありますから、それを飲んで歸るといふのはどうでしょう。ひとつ家へと参りましょう。〔生のセリ〕 弟よ、やめておこう、たびたび邪魔しているからなあ。〔末のセリ〕 兄貴、そうおっしゃらず行きましょう。大通りを抜け、裏道を抜け、茶房を通り過ぎ、飲み屋にも入らず、角を曲がればここが我が家です。兄貴、ちょっと待っていてください。愚妻を呼んで兄貴に挨拶させますから。〔呼ぶしくさ〕 奥様、奥様。〔淨のセリ〕 おっかさんは忙しいんだよ。〔末のセリ〕 何をしているんだい。〔淨のセリ〕 おっかさんは、借りた鍋で足を洗っているところだよ。〔末のセリ〕 その鍋に飯をもるんだぞ。〔淨のセリ〕 ちつ、ほんとにわきまえない人だね。〔末のセリ〕 奥様、お願いだ。劉の兄貴がおいでだから、挨拶をしておくれ。〔淨のセリ〕 劉の兄貴がおいでなら、おっかさんはますます忙しくなつたよ。おっかさんは、ここで腰巻をつけるのに忙しいつたらありゃしない。〔末のセリ〕 格好をつけるんじゃないよ。〔淨のセリ〕 おもとや、おまるをもつ

といで、小便をするから。宋のセリソ なんと、臭くてみっともない。さあさあ、出ておいで。

8【麻婆子】淨圓 奴奴生得如花貌。言語又不俏。丈夫喚做念

〔廿〕一郎、奴奴喚做三七嫂。奴在房中、補〔口〕〔衣〕補襖。

忽聽的丈夫郎〔嘆〕叫。老娘慌忙走來到。

〔回〕一箇兩箇、三四〔口〕〔五六七八九箇〕。困吓。〔

註〕你數的七八九是甚麼東西。淨〔六〕〔白〕我把你爛刀割、

碎刀剛、簸箕風兒、〔協〕〔扎〕不死的。都見你赶叫、一

箇也沒了。困說是甚麼東西。淨〔白〕是蜜蜂兒。見老娘

古怪標致、四千里地來老的頭上、壘窩兒。〔末〕你那

里賽過西施〔壯〕〔粧〕〔扮〕。賽過李奴奴強似劉〔二〕〔盼

〕。有時走在門前站、過來過往小漢子都把眼來看。

他說老娘相、相、相。〔末〕說你相甚麼。淨〔相〕那河

浩上〔嗅〕〔臭〕養漢。〔末〕娘子、我前日說的那瓶〔酌〕〔濁

〕醪。〔回〕甚麼是〔酌〕〔濁〕醪。困娘子、我和你夫妻、一〔吊

〕〔兩〕次說話〔酌〕〔濁〕醪是一瓶酒。〔回〕我把你兩鎗兒〔礼

〕〔扎〕不死的、兩來〔紅〕〔船〕丈不匾的。我和你七八百年

的夫妻、嚶子語、老鴉語、黑歸淺番、高班響盞兒一

條鞭。你〔洪〕〔哄〕我、酒便酒、甚麼〔酌〕〔濁〕醪。〔酌

〕〔濁〕醪、一一的你娘家祖宗、一箇也沒了。〔末〕可那

里去了。淨〔白〕我都〔撻〕〔養〕了。〔末〕和那箇〔撻〕〔養〕了。淨〔回〕和提偶的〔撻〕〔養〕了。

〔回〕蕭豪韻。

〔校〕汲本、始譜、成譜、欽譜、增譜、新譜、京譜、醉本。○

〔麻婆子〕諸本〔十棒鼓〕 ○「不俏」汲本・始譜・成譜・京譜・

醉本〔波俏〕、欽譜・增譜・新譜〔通峭〕 ○「喚」諸本「叫」

○「念」汲本・醉本「廿」 ○「奴在」汲本・始譜・成譜・欽

譜・增譜・新譜・京譜「方纒」、醉本「方纒在」 ○「口口」

諸本「衣補」 ○「忽聽的丈夫郎」汲本・成譜・欽譜・增譜・

新譜・京譜「忽聽老公」、始譜・醉本「聽得老公」 ○「老娘」

諸本、無 ○「走」汲本・成譜・欽譜・增譜・醉本「便」

〔註〕○「麻婆子」諸本は〔十棒鼓〕にするが、始譜の初韻第四格〔麻

婆子〕と格律がほぼ合致するので、改めない。 ○「奴奴」女性

の自稱詞。（宋元）参照。 ○「不俏」汲本等は「波俏」、欽譜等

は「通峭」に作るが、「不」と「波」、「不」と「通」はそれぞれ

一聲の轉であり、「不俏」「波俏」「通峭」はおそらくみな「俏」

の意。また、「生得如花貌」が淨の外見を逆説的に述べるとすれ

ば、「言語又不俏」も當然同様のことが考えられるのであり、「不

俏」「波俏」「通峭」が地方なまりをともなった表現であることを

思わせる。 ○「丈夫喚做念〔廿〕一郎奴奴喚做三七嫂」〔廿一

郎〕〔三七嫂〕は、「不問三七二十一」「不管三七二十一」という

常語を用いたもの。三と七の積は二十一であり、「似たもの夫婦」、ないし「不問三七二十一」の「不問」を取って「誰も相手にしない夫婦」の意をこめるのであろう。寶英才「談」三七二十一「的文化蘊涵」(『山西師大學報(社會科學版)』一九九二年第二期)参照。○(口口)(衣補)―諸本に従って補った。○丈夫(郎)

〔嘍叫〕―「郎」は「丈夫郎」ではなく「嘍叫」の誤りと考えた。南方方言の反映ではあるまいか。○(打住)―「住」はト書きの一部。『元刊本元雜劇三十種』では、「云住」「上住」など、「住」を用いたト書きが頻見されるが、その詳細は不明。○(濁(六))

〔白〕―「六」は「白」の字形から来る誤り。○爛刀刺……(協)〔扎〕不死的―末に對する淨の罵語。全體は「爛刀刺、碎刀剛、扎不死の」すなわち「刀で切り、えぐっても、死なない奴」の意。

〔爛刀刺、碎刀剛〕という表現は成化本第一八葉bにも見えるが、

〔爛刀〕〔碎刀〕は未詳。また、〔簸箕風兒〕も不明。ここでは、

〔風〕を「瘋」と考え、〔簸箕〕は「風」を導く枕詞として譯した。○老的―老年男子の自稱。(宋元)参照。○西施(杜)

〔粧(舟)〕〔淡〕―「西施淡粧濃抹」は常套表現(蘇軾「飲湖上初晴後雨」詩に「欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」とある)。それに従って「丹」を「淡」に改めた。○奴奴生的白似炭……相

那河浩上(嗅)(臭)養漢―この一節は、「炭」「扮」「站」「看」「漢」と天田韻・監咸韻で押韻する韻文(「相」も通押している可能性がある)。末の「粧淡」の語をうけての「打諢」であろう。した

がって第三句も押韻すると考えて、「二」には「盼」を補った。また、「相」は「像」、「養漢」は、よそに男をつくる、の意。「河浩上」は不明で、この三字に誤りが含まれる可能性が高い。

○娘子―年頃の女性、ないし、そうした年齢の人妻に對する呼稱(宋元)参照。○兩來(缸)(船)丈不匾的―「兩鎗兒扎不死の」と對をなしている點から見て罵語であることは明らかだが、意味は未詳。「丈不匾」の三字に誤りを含むだろう。俞本は「夾不匾」とし、ここでは、「丈」を「夾」ないし「撞」の誤りとして譯した。なお、明代のテキストにあつては「缸」字はしばしば天田韻

の韻字となり、「缸」字が「船」字としてあつかわれたことは明らかである。○(雙子語)……一條鞭―待考。ここでは、「黑歸淺番」を「烏龜淺翻」とし「高班」を「高板」として譯したが、

もちろん根據はない。「老鴉」「烏龜」「鞭」などの隱語を用い、恐らく性的なことをいうものである。○你娘家祖宗一箇也沒了―「你娘家祖宗」は「一箇也沒了」を導く「俏皮話(ないし歌後語)」であろう。「嫁の實家のご先祖様」を承けて「みななくなつた」というのである。○(擗)(養)了―この「養」字は、

「擗捨てる」と「養(男をつくる、男とできぬ)」との雙關であろう。淨が「擗了(捨てた)」と述べたのに對し、末が「和那箇養了(誰とねたのか)」と問い直すことによって、淨氣相手を白狀させているのである。なお、「提偶的」は、人形遣い。

【譯】

8 麻婆子 淨のうた 私は花のように美しい。言葉遣いもとても素敵。旦那は廿一郎といい、わたしは三七嫂という。わたしが部屋の中で、繕い物をしていると、ふと旦那の呼ぶ声が聞こえるので、おっかさんはあわててやってまいりました。

淨のセリフ 一箇二箇、三四五六七八九箇。宋のセリフ ちつ、殴るしぐさ 七八九と一體なにを勘定してるんだい。

淨のセリフ ふにゃふにゃ刀で滅多切りにしたって、小刀でえぐったって、どこ吹く風の瘋癲の、死に損ないめ。あんたが追い立てるのをみて一匹もいなくなっちゃったじゃないか。宋のセリフ なんのことだ。

淨のセリフ 蜜蜂だよ。おっかさんがへんてこりんできれいな物を見つけて四千里の彼方から飛んできて、おいらの頭を巣をつくっていたのに。宋のセリフ お前がどうして薄化粧した西施に勝るっていうんだ。

淨のセリフ あたしの肌は炭より白い。年がら年中おしやれが大好き。そこいらの李奴奴や劉盼盼なんかよりよっぽどきれいよ。時々門の前で立っていると、道行く若者たちが目配せしてくる。彼らは、おっかさん、似てる似てる似てるって言って、宋のセリフ 誰に似てるって言うんだ。淨のセリフ ああ川岸のみっともない夜鷹にそっくり、だとさ。宋のセリフ 若奥さま、

この前話したあのだぶろくだけど。淨のセリフ どぶろくって何さ。宋のセリフ 若奥さま、俺たちは夫婦だろうが。一二度言ったことがあるじゃないか。どぶろくといえは酒のことだよ。淨のセリフ 二本の槍でめった刺しにしたってくたばらない死にぞこない、二艘の船に挟まれてぶつけられたってつづれない奴ときたもんだ。あたしとあんたは七八百年も連れ添った夫婦だろ。マテガイがしゃべり、鴉が話す。龜が淺瀬でひっくり返り、拍子木や皿や鞭を打ち鳴らしてドンチャン騒ぎ。あんた、あたしをだましたね。酒は酒だろ、何がどぶろくなもんか。どぶろくはあんたの嫁の實家のご先祖様みたいなもので、全部無くなっちゃったよ。宋のセリフ じゃあ、どこへ行っちゃったんだ。淨のセリフ あたしが全部捨てちゃったよ(男とできちゃったよ)。宋のセリフ 誰とできちゃったんだ。淨のセリフ 人形遣いとできちゃったのさ。

宋云 (口) 如何(邊)發落。淨白 我前日買了斤半面使了一斤、還有半斤。我多着胡椒、少着姜(醬醋、趕一碗臘汁素面、與劉伯伯(滴)(敵)寒。你問他喫不喫。宋白 娘子少待、待我(云)去(去)問。大哥、前日一瓶(酌)(濁)醪、管待客人去了。如今家中有些面。你(娣)(婢)

媳婦多着胡椒、少着醬油、趕一筋臘汁素面、與大哥(滴)
 「敵」寒、多少是好。[匪] 兄弟、正中下懷。[淨] 老公、
 怎麼說。[末] 娘子、劉伯伯說、正中下(二)「懷」。[淨]
 可知道里。油(醬)「嘴」腔兒。老娘也喫兩碗。[末] 大
 嫂、和面。[淨] 老公、掃地。[末] 娘子、掃(他)「地」
 做甚麼。[淨] 和面。[末] 娘子、地上有土。[淨] 喫了
 土、長波羅(戒)「疥」兒。[末] 你去張媽媽家、去取按
 板使一使。[淨] 我去不的。我前日去他家、去討火、
 偷了一箇肥母雞。罵的我門兒出不的。我不去借。[末]
 娘子、怎生(發落)「發落」。[淨] 你(二)「俯」倒。腰脊梁
 上揉一塊面、我燒火下面。你請劉伯伯。[末] 腰脊梁
 9 [梧葉兒][匪] 知遠多蒙恩顧、(敢)「感」承愛憐。得(余)「魚」
 後(恁)「怎」忘(先)「筌」。我若身榮顯。管取來報前。[匪] 這嚴
 寒。喫一碗臘汁素面。[末] 喫
 10 [又][前腔]「一碗家(長)「常」淡飯。何須你苦掛牽。但略
 且止饑寒。待且等春雷動、大家朝帶鞦。[匪] 淨
 11 [又][前腔]寧可添着一斗、怎將他一口添。全不會管家
 「煙」[筌]。每日柴和米、醬醋油共鹽。[匪] 淨
 [壽][生] 相識如同親眷。[末] 朝朝每日廝見。[淨] 劉
 伯伯不使箇破錢。喫了一碗臘汁素面。[並下]

韻 天田、干寒、穢廉韻。

校記 9—汲本、始譜、成譜、吳本、響本、醉本。○「恩顧」

始譜「溫故」○「敢承愛憐」汲本·始譜·成譜·吳本·響

本「感蒙愛憐」、醉本「感蒙見憐」○「得余後恁忘先」諸本

「得魚後怎忘筌」○「我若身榮顯」汲本·成譜·吳本·響

本·醉本「待等春雷動」、始譜「異日風雲會」○「取」始譜

「教」○「前」諸本「賢」○「碗」成譜、吳本·響本·

醉本「梳」○「臘汁」諸本「合鍋」

10—汲本。○「又汲本」前腔」○「長」汲本「常」○

「淡」汲本、無 ○「你」汲本、無 ○「但」汲本、無

○「待且等」汲本「有日」○「大家」汲本「管取」

11—汲本、吳本、響本、醉本。○「又」諸本「前腔」○「着」

諸本、無 ○「將他」諸本「禁」○「不會」汲本·醉本

「不」、吳本·響本「不顧」○「煙」諸本「筌」○「柴

和米」諸本「要柴和米」○「油」吳本·響本「茶油」

註 ○「筋」「筋」が量詞であることは明らかだが、「筋」を「斤」

に改めるべきかどうかはよくわからない。○老公「老娘」

の對語としての「老公」。この場合、末を指す。○油(醬)「嘴」

腔兒「油嘴(おしゃべり)」と同意であろう。罵語。○波羅

(戒)「疥」兒未詳。「疥兒」は、疥癬蟲の寄生によつて生ずる傳

染性の皮膚病のこと。古屋昭弘前掲論文は、「波羅戒」を「波羅

蓋」とし、ひざがしら、の意とする。○媽媽「年長の既婚女

性」に對する呼稱。(宋元)漢參照。○(二)「俯」倒「前後」展

開から考えて、「うつ伏せになる」といった意味になるよう校訂した。○腰脊梁—現代語にも「腰脊骨」という語がある。

○(敢)(感)承爰隣—汲本等に従って改めた。○得(余)(魚)後

(恁)(恁)忘(先)(筈)—諸本に従って改めた。「得魚忘筈」は、目的を達してその過程の恩を忘れる、の意で、『莊子』「外物篇」に

「筈うゑは魚を在(とら)うる所以なり。魚を得て筈を忘る。蹄

(わな)は兔を在(とら)うる所以なり。兔を得て蹄を忘る」とあるのに基づく成語。○略且—「略且」で一語。しばらく、の意。疊韻

語。○大家—現代語の「大家」と同意。『杜荀鶴文集』卷一

「重陽日有作」詩に「大家拍手高聲唱、日未西沈且莫迴」とある。

(漢)参照。○寧可添着一斗怎將他—「斗」と「口」と

は類字音を用いた語呂合わせ。「一斗」は十升ではなく、ひとます。○家(煙)(筈)—諸本に従って改めた。○毎日柴和米

醬醋油共鹽—元曲等の登場詩に「教你當家不當家、及至當家亂如麻。早晨起來七件事、柴米油鹽醬醋茶」(『百花亭』第一折、『玉

壺春』第一折、『度柳翠』楔子等)の詩句があるように、「柴米油

鹽醬醋茶」は「七件事」といい、家事労働の代表。(宋元)参照。

○(詩)回—以下の四句は押韻しており、退場詩と考えられるため、補った。○破錢—ここでは「零錢」と同じ意味で用いられて

いるのであろう。

譯

宋のセリフ さてどうしたものか。 淨のセリフ あたしはこ

の前一斤半の麵を買って、一斤使ったけどまだ半斤なら残っているよ。胡椒を多めに入れて味噌と酢を少なめに入れ、一杯の素うどんを打って、それで劉兄貴の身體をあたためようじゃないか。あんだ、劉兄貴に食べるかどうかきいてみてよ。宋のセリフ 若奥様、しばらく待っててください、私がききに行きましよう。兄貴、この前の一瓶のどぶろくは客人に振る舞ってなくなりました。今うちには幾らかのうどんがあります。うちの愚妻が胡椒を多めに入れて味噌と油を少なめに入れ、一杯の素うどんを打つので、それで兄貴の身體をあたためるのはどうでしょう。淨のセリフ 弟よ、まさに希望通りだ。淨のセリフ おとっつあん、なんて言ってるのさ。宋のセリフ 若奥様、劉兄貴はまさに希望通りだ、と言ってますよ。淨のセリフ 當たり前だよ。このおしゃべりめ。おつかさんも二杯食べることにするよ。宋のセリフ 奥様は麵をこねてくださいな。淨のセリフ それじゃあ、おとっつあんは地面を掃いてよ。宋のセリフ 若奥様、地面を掃いてどうするんです。淨のセリフ 麵をこねるのさ。宋のセリフ 若奥様、地面には土がありますよ。淨のセリフ 土を食べたら波羅密多疥癬が出来るねえ。宋のセリフ 張のおかみさんの家に行っちゃったのべ板

を借りて来てくださいな。〔淨のセリ〕 あたしは行けないよ。前に、おかみさんの家に火を借りに行つてそのついでに一匹の太った雌鶏を盗んだら、それが見つかつて罵られ、あたしは門から出られないのさ。だからあたしは借りに行かないよ。〔宋のセリ〕 若奥様、さてどうしたものでしょう。〔淨のセリ〕 あんた、うつぶせになつてよ。背中をこねて、火を炊いてうどんを茹でよう。あんた、劉兄貴を呼んできて。〔劉を食へるしぐさ〕

9 〔梧葉兒〕〔宋のうた〕 わたくしこと劉知遠はたくさんの心配りを受け、怒しみを受けたことに感謝している。魚を獲たからといってどうして笠の恩を忘れるだろう。私でも立身出世したならば、必ずやあなた方の前恩に報いよう。〔合唱〕 このひどい寒さ、さあ一杯の素うどんを食べよう。〔宋のうた〕

10 〔前腔〕 一杯のあり合わせの粗末な食事ごとき、どうしてあなたが氣にかける必要があるうか。ただししばらくは饑えと寒さをしのごう。雷が轟く春ともなれば、皆で都に向かおう。〔合唱、前に同じ〕 〔淨のうた〕

11 〔前腔〕 ひと升の穀物を増やしてくれる分には良いけれど、口が一つ増えるのはまっぴらごめん。あたしはちつとも家宴の切り盛りが出来やしない。来る日も来る日も

薪や米、味噌・酢・油・鹽に追われっぱなし(あたしに切り盛りさせようたつてだめよ)。〔合唱、前に同じ〕

〔詩に曰く〕 〔宋のセリ〕 友人とは親族のようなもので、〔宋のセリ〕 毎日毎日顔をあわせています。〔淨のセリ〕 劉兄貴は一錢も使わず、一杯の素うどんを食べやがった。

〔一同退場〕

第三出 (淨(馬明王廟の提點)、末(馬明王)、生、外(李大公)、貼(李婆婆)、且(李三娘))

〔淨扮道士上〕 但(辨)〔辨〕志誠心。何勞神不靈。但(辨)〔辨〕志誠意。何勞神不喜。

小道是馬明王廟中提點。不免打掃廟堂干淨、請出我馬明王老子。因明日是十五日、李大公來賽願。〔淨〕我如今便收(什)〔拾〕干淨等待。〔宋〕我如今步步罡(科)〔斗〕了、太上老君勅(灰)〔誠〕下。

〔註〕 ○〔淨扮道士上〕 淨は、第二出の末尾では史弘肇の妻として退場し、第三出の冒頭では道士として登場する。こうした演出は、當時の劇團組織、上演方法を考へた場合、実際にはありえないことと推測され、成化本が上演テキストに基づいた完本なのでなく、

節略本であることを思わせる。因みに、汲本は本出を第四出とする。○但(辨)〔辦〕志誠心……何勞神不喜 汲本第四出【小引】

に同様の句がある(但し、汲本は「不喜」を「不至」に作る)。「心」と「靈」、「意」と「喜」が韻を踏み、開場詩になっている。各聯はともに成語であろう。なお、「志誠」は「至誠」の意だが、しばしば「志誠」と表記される。○提點—宋代以後、道士は道

録司に所屬し、道士としての職名をもった。「提點」はその職名で、道觀や廟に配屬されてそこを管理する者、の意味。「提舉」よりも上級にあたる。○老子—自稱の場合は、おれさま、他

稱の場合は、親分、といったような意味。○困—上句「請出

我馬明王老子」の末尾につく「來」字の誤りである可能性もあり、現に俞本は「來」とする。ここでは、南戲系の芝居がしばしば神格を登場させること、汲本第四出が馬明王を登場させていること、本出の後の展開に神像が必要だと思われること、後文に太上老君という上級神が言及されること等の理由から、末が馬明王に扮して登場したものと考えた。○(困) — 「我如今」が二度現れることから、この部分を淨と末との對話と考えた。○我如今歩

步罡(科)〔斗〕了太上老君勅(灰)〔誠〕下—待考。この二句は誤りを含むと思われるが、校訂する決めに缺く。「歩罡」は「歩罡踏斗」ないし「踏罡歩斗」ともいい、星宿や神格を祈る際に北斗七星の形に従って足踏みをするをいう。戯曲文學に登場する道士、神の卜書きには「歩罡科」の語が散見される。ただしここで

は「歩歩罡斗」の誤りとして解した。「罡」は北斗七星の柄、「斗」は升の部分を指す。また、「太上老君」は道教の最高神の一人で、老子のこと。神界の帝位にあると認識されていたので、「勅」という語が用いられる。「灰」字は恐らく「誠」の音通。

〔譯〕

〔淨〕が道士に扮して登場 眞心さえ持っていれば、神の靈驗があるに違いない。ほんとうの氣持ちがあれば、神さまはど

うして喜ばないなんてことがあろうか。

私は馬明王廟の宮司です。廟をきれいに掃除して、うちの馬明王の親分に來ていただきましょう。〔末のセリ〕

日は十五日、李の旦那がお参りに來るぞ。〔淨のセリ〕

では、私は今からきれいにとり片づけて、待つことにしましょう。〔末のセリ〕 私が北斗の型に足踏みをすれば、太上老君様の勅命が下るであらう。

1〔夜行船〕〔金蕉葉〕〔困〕 奈何奈何。恨蒼天把人悞却。自恨我時乖命薄。天哦有誰人採我。

〔回〕 富不親兮貧不疎。此乃是人間大丈夫。富(若親)〔則進〕兮貧則退。此乃是人間眞小輩。

我劉知遠只因好賢學武、博藝〔奕〕貪杯、壞盡潑(大家計、止被晚父趕出、不容知遠還家。日間在賭博場中、夜間宿在馬明王廟中。如今(分分)〔紛紛〕揚揚下着這等

大雪。我劉知遠出不的廟門、怎生是好。東廊下又是風緊、西廊下又是雪緊。不免往正殿上潛藏。弄假相眞。開開門來、聖賢正在上面。聖上、我劉知遠在此廟中打攪多日了、不免參拜聖賢、禱告(三)(幾)回。好大雪也。

韻 歌羅韻(却・薄)。

校記 汲本、醉本。○「夜行船」諸本「金蕉葉」○「悞却」諸

本「就誤」○「自恨我時乖命薄。天哦有誰人採我」諸本「自恨時乖運苦、怎禁這般折挫」

註 ○「夜行船」(金蕉葉)——本曲は「夜行船」の格律に合わないため、諸本に従って「金蕉葉」に改めた。○悞却——「却」はここ

では入聲音ではない。「却」は『中原音韻』では蕭豪韻に入るが、本曲にあつては歌羅韻と思われる。○天哦——「哦」は句中韻

かもしれない。○富不親兮貧不疎……此乃是人間眞小輩。元刊本「事林廣記」「人事類」「結交警語」に「富不親兮貧不疎、此

是人間大丈夫。富則進兮貧則退、此是人間眞小輩」とあるのに従つて本文を校訂した。成語。この四句は「疎」と「夫」、「退」と

「輩」が韻を踏んでおり、登場詩。○藝(奕)——「こ」でも、入聲音と非入聲音が混同されているように思われる。○晚父

——「晚母」の對語で、繼父、の意だろう。○弄假相眞——「相」は「像」、「弄假相眞」は、嘘をやるなら眞らしく、の意ではある

まいか。中國の古典演劇は、周知のごとく舞台裝置を全く用いない。このセリフは、たとえば『張協狀元』第一〇出にある滑稽なやり取りと同様、舞台裝置がないことによつて展開されるバントマイムを説明した一言ではあるまいか。○聖賢——馬明王を「聖賢」と表現するのは奇異の感を免れないが、この語が二度用いられている點から見て、誤りではないと思われる。

譯

1「金蕉葉」(注のうた) いかんともいかんともしがたい。我が運命を神様が誤らせてしまったことが恨めしい。我が身の運のつたなさが恨めしい。ああ神様よ誰が私をかまってくれるというのだろう。

注のセリ 富者に親しまず貧者を疎まず。そうしてこそ立派な男というもの。富者に進み寄つて貧者を退ける。これぞまことにつまらぬ輩。

わたくし劉知遠は、賢者を好み武藝を學び、博打は打つは酒は貪るはで、天を突くほどもあつた家財を使い果たしたために、義父に追い出され、家に歸ることも許されない始末となりました。そんなわけで今は、晝は賭博場、夜は馬明王廟で過してゐる次第。さて今、紛々たる大雪が降っています。わたくし劉知遠は廟を出ることができません、いったいどうしたものでしょう。東の廊下は風が強く西の

廊下は雪がひどい。致し方ないので正殿に隠れることといたしましょう。芝居をするなら眞らしく、と。さて門を開けると、聖像がちょうど上に御座います。神様、わたくし劉知遠はながらくお邪魔していますから、聖像を拜み、幾度か祈りましょう。それにしてもなんとひどい雪でしょう。

【圖】

2【一江風】凍雲垂。凜凜朔風起。刮的我好難存立。我自思(知(之))。(往(枉)有一(旦)(擔)英雄、到此成何濟。我身寒肚又饑。(又饑(我身寒肚又饑)。愁番(煩)訴與誰。空滴盡了英雄淚。

3【又(前腔)】告神祇。可憐見我無依倚。三兩日無糧米。淚偷垂。

回常言道、村別(云)去處、無處買香。回又待撮土焚香、拜告(我)天和地。

回就將賭博事情告訴一遍。回鋪牌買快時。抹牌買快時。十番九便輸。望神聖與我陰空保庇。

回焚香以(畢)(畢)。遠遠的望見一叢人來、挑着香花紙煙。敢是廟中賽願的。我不免躲在神道背後。祈牌得勝之時、我搶(時)(些)祭物充饑。常言道、一日不(失)

【識】羞、十日不忍餓。不免且躲着。

【圖】機微(立)、支思、居魚韻。

校記 汲本、醉本、綴本。○「凍雲垂。凜凜朔風起」綴本「雪晴時。拂拂和風起」

○「刮的我好難存立」汲本・醉本「刮體難存濟」綴本「再再寒威退」○「我自思知」諸本「自思之」

○「往」諸本「枉」○「我身寒肚又饑。又饑」汲本・綴本「身寒肚又饑。身寒肚又饑、醉本「身寒肚又饑」○「愁番」汲本・綴本「愁煩」、醉本「這愁煩」○「滴盡了」諸本「教我滴盡」○【又】諸本「前腔」○「可憐見我無依倚」汲本・醉本「神聖聽咨啓」、綴本「神靈聽咨啓」○「三兩日」汲本「可憐三日」、醉本・綴本「可憐我三日」○「又待」諸本「只得」

○「焚」諸本「爲」○「我天和地」諸本「天和地」○「鋪牌買快時。抹牌買快時」汲本・綴本「蒲牌買快時。蒲牌買快時」、醉本「鋪牌買快時」○「番」綴本「翻」○「九便」汲本

「九遍」、醉本・綴本「到有九遍」○「聖」醉本・綴本「靈」○「陰空保庇」諸本「空中庇」

【註】○我身寒肚又饑(又饑)「我身寒肚又饑」成化本の原文では、一回目の「我身寒肚又饑」の後にどり字が二つ書かれており、

そのとおりに文字に起こせば「又饑」だけが二度繰り返されることになる。だが、ここは句格からいって一句全體が二度繰り返されるべきであろう。○可憐見——「可憐得」ないし「可憐着」

○可憐見——「可憐得」ないし「可憐着」

○可憐見——「可憐得」ないし「可憐着」

○可憐見——「可憐得」ないし「可憐着」

の意。(匯)参照。 ○常言道村別(三)(去)處無處買香一未詳。

俞本は「村別云處」を「村僻去處」とする。「僻」と「別」を音通とするのであろう。この意に解して譯をつけた。ただし、その意に解してもこれがかいかなる成語かは明らかにならない。 ○

撮土焚香—「撮土爲香」「撮土焚香」とも言い、『魔合羅』第一出【醉中天】に「我然土焚香畫地爐」とあるように、臨時に神に祈る際に使われる常語。 ○鋪牌—俞爲民氏は唐・李肇『國史補』

卷下「敘古樗蒲法」を引き、「博戲の一種」とする(『宋元四大戲文讀本』、江蘇古籍出版社、一九八八)。 ○買快—カード等で賭けをする際、ひいたカードに應じて速やかに「口令」をいう。これを「買快」という。(漢)参照。その具體例は『金瓶梅』等に

描かれる。なお(宋元)は單に、賭博、の意とする。 ○抹牌—『元典章』「刑部」(一九)「禁賭博」に「抹牌賭博斷例」という一條がある。「抹牌」はカード賭博の謂であらう。なお、曲律からいえばここは「鋪牌買快時」の句が二度繰り返されるべきだが、二句目の「鋪牌」が「抹牌」に變えられることによって、どんな賭けをしても、の氣持ちが加えられていると思われる。 ○陰

空—「殺狗記」第二出に「你生則爲人、死則爲神、望陰空保佑我兄弟和順」とある。「陰空」は、冥界、ないし草葉の陰、といった意。 ○紙煙—「紙煙」は、元來は「紙錢」を焼いた煙を指すが、ここでは單に「紙錢」の意であらう。 ○敢是—おそらく、きつと、といった推量の意。(宋元)参照。 ○祈牌得勝

之時—未詳。このままでは意をなさないので、「散福得剩之時」の誤りとして譯した。「散福」は、神やご先祖へのお供え物を來會者全員で分けることで、「勝」は「剩」の同音からくる誤りと考えた。 ○(時)(些)—汲本に「取些福禮充饑」とあるのに從った。 ○一日不(失)(識)羞十日不(忍)餓—成語。『劉弘嫁婢』

第一折に「一日不識羞、十日不(忍)餓、把這羞臉揣在懷里、我選過去」とある。「失」は「識」の發音からくる誤り。「一日不識羞、十日不(忍)餓」は、他に「一日不(害)羞、三日(喫)飽飯」「一日不識羞、三日不(忍)餓」「一日不識羞、三日(喫)飽飯」ともいい、いずれも、一日恥を捨てさえすれば三日(十日)は生きていける、の意。

譯

生のうた

2【一江風】凍った雲が低く垂れ込め、寒々と北風が吹き、我が暮らし向きを悪くする。思えば、我が英雄ぶりもすべてあだ、何の助けになるうか。身は凍え腹はすくばかり、身は凍え腹はすくばかり、憂いを誰に訴えたものか。むなくしく落ちるはただ英雄の涙。

3【前腔】どうか神様、寄る邊のないわが身をどうか哀れに思いたまえ。この二三日食べる飯とてない。ひそかに涙を流し、

【入れゼリ】 諺にも「村から外れた場所では、線香一本買えはせぬ」と申しますが、うた

土をつまんでお香とし、天と地とに申しあげよう。

〔入れゼリ〕博打について申しますれば、うた

「鋪牌」で賭けをやっても、「抹牌」で賭けをやっても、十回やれば九回は負けるというありさま。どうか神様よ私を冥界からお守りください。

〔佐のセリ〕さて、お香は焚き終わりました。遠くを見れば、お供え物や紙錢を擔いだ一團の人々が参ります。きつと廟にお参りに来るのでしようから、私は神様の後ろに隠れましょう。お供え物が残ったら、それを取って腹の足しにいたしましょう。諺にも「一日恥を捨てさえすれば、十日は腹がくちくなる」と申します。さあ、隠れましょう。

〔外上置〕

4 〔三臺令〕祥光影裏。見寶殿盡是金粧銀砌。〔閏〕寶閣珠樓、琉璃〔苑〕〔駕〕瓦侵雲〔砌〕〔起〕。〔閏〕金釘〔珠〕〔朱〕門、兩廊下塑猊神惡鬼。

〔外白〕爲聖爲尊爲〔弟〕〔第一〕、靈感善惡〔口〕無雙。年〔年〕降福到人間、戸戸蒙恩皆敬仰。〔閏〕前面山如太岳、後面水遶山園。〔王〕〔御〕〔乙〕〔書〕金額勅賜馬明王〔王〕之廟。〔閏〕判〔官〕〔斷〕善惡掌人間、福祿死生通奏過。

〔外白〕正是、萬年香火永留傳、戸戸蒙恩皆敬信。

〔閏〕機微韻。

〔校記〕汲本、醉本。○〔三臺令〕汲本「疎影急」、醉本「疎引急」

○「寶」諸本「宮」 ○「金粧銀砌」諸本「金裝玉砌」 ○

「苑瓦侵雲砌」諸本「駕瓦侵雲起」 ○「珠門」諸本「朱戸光

曜日」 ○「猊神惡鬼」汲本「猊猊小鬼。〔閏〕巧裝成神像多靈

異。威嚴相貌世間無比」、醉本「猊猊小鬼」

〔註〕○〔三臺令〕汲本は「疎影急」とし、末尾に二句の合唱を附す。

また、醉本は「疏引急」とし、合唱がない以外は汲本と字句を同じ

くする。本曲は「三臺令」とは格律を異にするが、「疎影急」「疏引

急」の曲名が曲譜類に見えないので、いま假に「三臺令」の名に従

う。なお本曲は、第一出の2「疎影」〔絳都春犯〕と、曲文及び格

律において相似点が見られる。 ○靈感善惡〔口〕無雙年〔年〕降

福到人間―「爲聖爲尊爲第一」より「戸戸蒙恩皆敬仰」までの四

句は、「雙」「仰」で押韻する韻文のように思われるので、七言句

になるように空格とおどり字を補った。各句平仄の二四不同も概

ね守られている点からすれば、「感」は別の字に校訂すべきかも

しれない。なお、後の「前面山如太岳、後面水遶山園」「萬年香

火永留傳、戸戸蒙恩皆敬信」もそれぞれ對聯になっている。

○〔王〕〔御〕〔乙〕〔書〕金額―「王」はもともと「玉」の誤字で、こ

こでも入聲の「玉」が非入聲音の「御」と普通になっている。「乙」

は「書」の草書體からくる誤り。「金額」は「金孝牌額」の意。

○判(官)斷——文意によって改めた。

譯

外が登場してうたう

4【三臺令】神々しい光の中、見れば神殿は金や銀を積みあげたよう。困目のうた 華麗な樓閣は、瑠璃の鴛鴦瓦が雲を衝いてそびえ。困目のうた 金の釘を打ってある赤い門を通れば、左右の廊下には猛々しい神様と惡鬼の像が居らぶ。

【外のセリフ】神様のなかでも第一番、人間世界の善惡に感應すること並ぶものがない。年々に福を下さり、どの家も御恩を賜わりみな敬慕しております。困目のセリフ 前の山は泰山のよう、後ろには川がめぐり山がとり圍む。御書による金字の額には「勅賜馬明王之廟」とあります。困目のセリフ 善惡を裁いて人間世界を掌り、幸福と生死を全て天に奏上なさる。【外のセリフ】まさしく、香火はとこしえに後代へと傳えられ、どの家も恩を賜わりみな畏れ敬うというもの。

【困目】(八八)(巴巴)到於廟前。怎生不見提點一面。【外白】待老夫叫一聲、提點。【淨】那箇叫。【外白】李大公在此。【淨】我貧道來了。官清民吏瘦、神靈廟(王)(祝)肥。李大公、哎、一家都在這里。大公稽首。【外白】提點拜揖。【淨】大婆稽首。

【困目】提點萬福。【淨】三娘子稽首。【困目】提點萬福。【外】起動提點禱祝一回。【淨】一上香、二上香、三上香。李大公來的荒荒獐獐、不會買的好香、自屋里神道說過便了。李大公來的荒荒促促、不會買的紙燭、自屋里神道說過便了。大公、好大猪頭、好大魚、好大鷄也。大公、將就將就。請上香。

註 ○(八八)(巴巴)——入聲音と非入聲音の音通。「巴巴」は、わざわざの意。(宋元)參照。○官清民吏瘦神靈廟(王)(祝)肥——成語。元刊本『事林廣記』「人事類」「居官警語」に「官清人吏瘦、神靈廟祝肥」とある。「王」はもともと「主」の誤字で、「主」は「祝」との同音からくる誤り。ここでも非入聲音の「主」が入聲音の「祝」と音通になっている。○一上香……一上香、二上香、三上香——はいわゆる三獻。以下の文章は「香」「獐」「香」「促」「燭」と韻をふんでいるように思われ、一種の言葉遊びかもしれない。○自屋里——「張協狀元」第一一出に「屋裏姓王」「我屋裏也有錢」などの表現がある。「屋裏」は自稱詞。おそらく方言の類であろう。○將就——「免將」「遷就」の意。(宋元)參照。

【困目のセリフ】わざわざ廟に來たというのに、どうして官司がないのかしら。【外のセリフ】わしが一聲呼んでみよう、

宮司。〔淨が應じる〕誰が呼んだんだ。〔外のセリ〕李大公がここに参りました。〔淨のセリ〕それがしがただいま参ります。「官が清ければ吏はやせ細り、神様が靈驗あらたかならば宮司は肥え太る」というもの。李の旦那さま、おや、皆さんおそろいで。旦那さま、こんには。〔外のセリ〕宮司さん、こんには。〔淨のセリ〕奥様、こんには。〔麴目のセリ〕宮司さん、こんには。〔淨のセリ〕三番目のむすめさん、こんには。〔目のセリ〕宮司さん、こんには。〔外のセリ〕宮司さん、手敷を掛けますが、ひとつお祈りさせて下さい。〔淨のセリ〕最初のお香をお供えして、二回目のお香をお供えして、三回目のお香をお供えし、李の旦那さまが慌てていらっちゃって、よいお香を買っていません、うちの神様は言に行けば結構です。李の旦那さまが慌てていらっちゃって、紙銭や蠟燭を買っていません、うちの神様は言に行けば結構です。旦那さま、なんと立派な豚の頭、なんと立派な魚、なんと立派な鶏でしょう。お世話をおかけします。どうぞお香をあげて下さい。

外唱

5〔作〕〔降〕黄龍〔二〕黄龍哀〔三〕燃〔起〕道〔得〕〔德〕香〔一〕〔麴〕、〔朝〕〔超〕三界爐煙細。危閣危樓、危臺殿通情旨。〔窓〕弟子

家住、在沙陀村里。同家眷男女、到來瞻〔瞻〕禮。〔麴唱

6〔前腔〕舉眼望〔遙指〕〔瑤池〕。〔麴〕。早〔知〕〔已〕知〔殘會

〔慚愧〕。見臘雪〔成〕〔呈〕祥、先報道豐年歲。並無荒〔汗

〔旱〕、麥生雙〔二〕〔穗〕。〔合前〕〔回唱

7〔前腔〕三娘本嬌媚。〔麴〕。父母多年紀。生長在村〔方

〔坊〕、勤紡績工針指。〔合前〕〔回唱

8〔前腔〕三牲不見來、〔麴〕、卓兒上空空的。酒菓又全無

又無香和紙。馬鳴王神道、神道好生不歡喜。濃眉毛、大

眼〔睛〕〔睛〕、高鼻子。落腮鬚、撮〔撮〕〔場〕〔鬚〕〔嘴〕。〔口

判官、瞎小鬼。你每休要胡牙亂齒。〔合前

〔外唱〕婆婆、女孩兒、先回家去。我老夫這里〔起〕〔祈

一盃。

〔外唱〕〔詞〕福禮三牲辦志誠、祭賽鳴王眞至靈。萬事勸

人休碌碌、舉頭三尺有神靈。〔並下

〔關〕支思的、機微韻。

〔校記〕5—汲本、成譜、醉本、綴本。○〔作黄龍〕汲本・醉本〔花

滾〕、成譜〔黄龍哀〕、綴本〔滾遍〕。○〔燃道得香〕汲本・醉本

〔然起道德香、然起道德香〕、成譜・綴本〔然起道德香、然起道

德香〕。○〔朝〕諸本〔超〕。○〔危閣危樓、危臺殿通情

旨。〔窓〕弟子家住、在沙陀村里〕汲本〔鬼閣鬼樓殿、通情旨。弟

子家住、沙陀村里。〔窓〕、成譜〔魏閣魏樓、登殿通情旨。弟子家

住、沙陀村裏。〔合〕、醉本「巍閣巍樓殿、通情旨。弟子家住、在沙陀村裏。〔合〕、綴本「業守田園、保祐豐稔無災異。人口咸寧、吉祥如意。〔合〕 ○「到」綴本「特」 ○「瞻」諸本「瞻」

6—汲本、醉本、綴本。 ○〔前腔〕諸本「前腔」 ○「舉眼望遙指。早知知殘會。見臘雪成祥、先報道豐年歲」綴本「稽首拜神祇。稽首拜神祇。擺設牲和醴。燭影爐煙、繚繞連天際」

○「舉眼望遙指」汲本・醉本「舉眼望瑤池。舉眼望瑤池」

○「知知殘會」汲本・醉本「以知慚愧」 ○「成」汲本・醉本「呈」 ○「先報道豐年歲」汲本・醉本「預報豐年瑞」

○「並」綴本「願」 ○「荒汗」汲本・醉本「早涸蟲蝗」、綴本「水旱蝗蟲」 ○「二」諸本「稔」 ○「合」汲本・醉本「合」、綴本「今日裏仗名香叨神庇。〔合〕合家眷男女、特來瞻禮」

7—汲本。 ○〔前腔〕汲本「前腔」 ○「三娘本嬌媚」汲本「三娘本嬌媚。三娘本嬌媚」 ○「在」汲本、無 ○「方」汲本「莊」 ○「工針指。〔合〕汲本「攻針指。願降慈祥、父母雙全喜。〔合〕

8—汲本、醉本、綴本。 ○〔前腔〕諸本「前腔」 ○「三性不見來」汲本・醉本「三性不見來、三性不見來」、綴本「三性不見鷄。三性不見鷄」 ○「卓兒」汲本・醉本「几案」、綴本「桌」 ○「又全」醉本・綴本「全」 ○「又無」汲本・醉本「又沒些」、綴本「又沒」 ○「馬鳴王……〔合〕汲本「馬

鳴王粗眉毛、大眼睛、落腮鬚、有些不歡喜。〔合〕你們休得胡言語。〔合〕、醉本「馬鳴王粗眉毛、大眼睛、蹠蹠嘴、落腮鬚、有些不歡喜。〔合〕你們休得胡言語。〔合〕、綴本「派虛花如同見鬼。馬鳴王蠟塌嘴。空歡喜。〔合〕你每休得胡言語、神道非同鬼。戲好把虔心對聖祇」

〔註〕○（作）〔降黃龍〕（黃龍衰）——本曲は〔降黃龍〕の格律に合わないため、成譜に従って〔黃龍衰〕に改めた。 ○〔燃〕起——諸本により補った。 ○〔疊〕——汲本等により補った。以下三曲の「疊」も同様。 ○三界——欲界・色界・無色界。 ○男女——召使い。（宋元）參照。 ○（二）〔稔〕——「稔」は原文では訛字。諸本に従って改めた。 ○〔合〕前——第二曲目の合唱は「同家眷男女、到來瞻禮」の二句のみと思われる。 ○〔殘會〕〔慚愧〕——「殘會」は「慚愧」の音通による誤り。「慚愧」は、ありがたいの意。（變）〔漢〕參照。 ○勤紡績工針指〔合〕——第三曲目の合唱は「弟子家住」から「到來瞻禮」までの四句と思われる。 ○三性不見來……—貧乏道士の嘆きをうたうもの。汲本はこの曲の間に供え物が盗まれるという情節を挿入するが、従わない。 ○濃眉毛……—胡牙亂齒—增句である。『張協狀元』第一六出に「淨睜眼作威」〔怎比馬明王〕とあり、馬明王像は醜い顔で有名だったと考えられる。ここはそれを踏まえ、醜い顔を馬明王の怒りに代えて笑いとしたもの。「落腮鬚」は「絡腮鬚」。「撮」は「裂」。「塌嘴」は、「獨角牛」第二折「紫花兒序」に「磣可可塌塌鼻歪」

とあり、ゆがんだ口をいうものと思われる。 ○(□)判官瞎小

鬼―馬明王像と共に置かれる「判官」と「小鬼」の像をいう。「瞎小鬼」の對語として「判官」の前に一字あると考へ、空格を挿入した。 ○你每休要胡牙亂齒(合唱)第四曲目の合唱は「同家

眷男女、到來瞻禮」の二句であると思われる。 ○(起)祈一

盃―「盃」は「盃筮」で、占いのこと。 ○萬事勸人休碌碌舉

頭三尺有神靈―成語。『琵琶記』第二七出、『殺狗記』第二六出それぞれ退場詩に「萬事勸人休碌碌、舉頭三尺有神明」とある。

譯

外のうた

5【黃龍衰】神に香を供えれば、神に香を供えれば、三界の人々を濟度する煙が爐から立ち上がる。この馬明王廟の高殿から、神様に氣持ちをお傳えしましょう。(合唱)私どもは、沙陀村の者。家族と召使いを連れて、お参りにまいりました。(貼旦のうた)

6【前腔】眼をあげて瑤池とも見まがう馬明王廟を眺めやれば、眼をあげて瑤池とも見まがう馬明王廟を眺めやれば、早くもありがたみが湧いてくる。見れば雪が舞って吉兆を知らせ、豊作となることを教えてくれます。今年は饑饉がなく、麥は一本の莖に二本の穂が出ることでし

よう。(合唱、前に同じ) 目のうた

7【前腔】わたくし李三娘は元々かわいいむすめ、わたくし李三娘は元々かわいいむすめ、父母は年老い、私はこの村に生まれ育つて、針仕事につとめます。(合唱、前に同じ)

淨のうた

8【前腔】お供えなんて見たことない、お供えなんて見たことない、机の上はいつも空っぽ。酒も果物も見たことない、香も紙錢も全くない。馬明王様は、馬明王様はなんとも不機嫌、濃い眉毛、大きな眼、高い鼻、毛むくじやらの顔、ねじれてひしゃげた口(であんな怖い顔をしていらっしやる)。□の判官、めくらの小鬼よ、おまえたちはがたがた騒ぐんじゃない。(合唱、前に同じ)

外のセリフ 婆さん、むすめや、先に家に歸っておいで。

わしはここで占いをひとつやっていくから。

貼旦のセリフ 詩に曰く お供え物をして真心を表し、馬明王様をお祀りすればまことに靈驗あらたか。何事もあくせくするものではない、頭を挙げればすぐそこに神様はいらっしやるのだから。(□ちからも退場する)

外の 起動提點祈一(兆)(筮)。(做討卦) (生倫雞科) 提點、怎生

神道兒。(淨白) 我這神道有靈感。大公連討了三箇聖卦。(外白)

老夫告回。

(詩白) 神靈親臨下降。願得消除災障。(淨白) 你若與我錢

多、三箇都與你上上。外

淨白 道童、收三牲去也。哎呀、怎生不見鷄了。這是李大公偷去了。叫他回來。大公、大公。外白 提點、我走偌近遠、叫我老夫回來、有甚麼話說。淨白 如何將我福鷄偷去了。外白 我老夫破財爲福、如何偷將你福鷄去。我和你兩廊下尋。〔闕尋科〕〔淨見生打科〕外勸住 是我姪兒。淨白 是你姪兒。連骨頭兒不剩裏。得放手時須放手、得饒人處且饒人。〔淨下〕外勸住 你是那里人氏、因何做這等營生。〔生白〕小人就是本村人氏、姓劉、名知遠。被繼父趕出、不容知遠回家。〔以併〕此是這等大雪、往此廟中避寒。見大公挑着香火紙燭、到此廟中賽願、以此搶些福禮充饑。實不瞞大公說、我三日無一顆米下肚了。

註 ○祈一〔兆〕〔筊一〕〔兆〕は「筊」の音通による誤り。

〔詩目〕以下に韻文がくるので補った。外の一應の退場詩である。○神靈親臨下降……三箇都與你上上―汲本では貼且と且の退場詩として用いられている。なお「上上」は「上上大吉」の意。「降」「障」と押韻するために「大吉」といわず「上上」といったもの。○偌近遠―『單鞭奪槊』第四折〔四門子〕に「那一箇奔、這一箇趕、將和軍樂的偌近遠」とあり、また『昇仙夢』第三折に「相公、偌近遠、我也受不得這等辛苦」とある。「近遠」で誤りではなく、「遠」の意。○爲福―「福」は「福禮」の

意。續く「福鷄」の「福」も同じ。○外勸住―「住」は元刊

本の雜劇にしばしば見える、ト書きの一部。前出の註参照。

○得放手時須放手得饒人處且饒人―成語。『竇娥冤』第二折のほか、『幽閨記』第七出にもほぼ同じ表現が見られる。○〔以併〕

此是―文意により改めた。俞本は「以此時」とする。

譯

外のセリ 宮司さんのお手をお借りして一つ占いをいたしましょう。占いをするしぐさ 巫が鷄を盗むしぐさ 宮司さん、神様のご意志は如何でしょう。淨のセリ うちの神様は靈驗があらたかです。且那さまは續けざまに三回占いをいたしました。外のセリ 私は歸りましょう。

〔詩に曰く〕神様はご降臨下さって、どうか災いを消してください。くださいますよう。淨のセリ あなたがもし私に餘計にお金をくだされば、三回とも大吉を出して差し上げるのに。外退場する

淨のセリ 小僧や、お供え物をかたづけなさい。やや、なぜ鷄がないんだ。李の且那が盗んで歸ったに違いない。呼び戻さなくては。且那、且那。外のセリ 宮司さん、私がかんなに遠くに來ているのに、呼び戻すのはいったい何のお話ですか。淨のセリ どうしておれのお供えの鷄を盗んだんだ。外のセリ このわしだって金をつかってお供えしたんだ、どうしてあなたのお供えの鷄を盗もうか。

一緒に廊下を探してあげましょう。探すしぐさ 溇が生を見つけてなぐるしぐさ 外がどがめる これはわたしの甥っ子だ。溇のセリフ おまえの甥っ子だって。骨まで残さず食べやがった。まあ「許せるときには許すがいい、見のがせるときには見のがそう」とも言うことだし。溇退場する 外が生にむかって呼びかける おまえはどここの誰で、どうしてこんなまねをする。内のセリフ 手前はどの村の者で、姓は劉、名は知遠と申します。義父に追い出され、家に戻ることを許されません。そのうえこんな大雪で、この廟に来て寒さをしのいでいたのです。旦那さまがお香や紙銭・蠟燭をかついでここに願掛けにやってきたものですから、お供えをちよいと失敬してこの餓えを充たしました。實を言うと旦那さま、わたくしこの三日というもの米粒ひとつとて腹に入れてはいないのです。

9 【好姐姐】外 看伊。堂堂貌美。因甚麼不謀些生(禮)(理)。
 你家住在那裏。未知你名姓誰。休憂慮。你會務農耕田地。帶你歸家作道理。内
 10 【前腔】我祖居。沙陀小里。(姓)(字)知遠劉家嫡業(子)。我雙親幼失。異日無靠倚。蒙週(祭)(濟)。若得大公(牧)(收)留去(取)。結草啣環拜謝你。

外 後生、(計)(既)是這等、我家中有三二百人做年

作、不爭你一箇喫飯。你肯早晚勤謹務農(根)(跟)我家去。内 若得大公週濟、感恩非淺。外 又一件事與你說、我家中有一箇大兒子李弘一、有些酒性(燥)(躁)惡、早晚依隨他些便了。内 大公所煩事、都依大官人主張。外 這等、好好(根)(跟)我家去。

詩 不圖富貴受甘貧。自古隄防(仁)(人)不(入)(仁)。
 内 今日得公提(奪)(撥)起、免交人在汚泥中。下

機微(失)、居魚韻。

校記 汲本、醉本、綴本。○「伊」諸本「你」○「甚麼不謀些生禮」汲本・醉本「甚的不謀生理」、綴本「甚的不謀生計」

○「你家住在」諸本「家居」○「未知你名姓」諸本「姓名還是」○「休憂慮」諸本「聽吾語」○「會務農」汲本・醉本「肯務農」、綴本「肯務農桑」○「歸」綴本「回」○

「我祖居」諸本「祖居」○「沙陀小里」汲本・綴本「在沙陀村裏」、醉本「沙陀村裏」○「姓」諸本「字」○「業」諸本「子」○「我雙親幼失」汲本・醉本「雙親早亡」、綴本「雙親早喪」○「異日無靠倚」諸本「此身無所倚」○「祭」汲本・醉本「濟」、綴本「庇」○「大公牧留去」汲本・醉本「大公收留取」、綴本「大公相留取」○「拜謝你」汲本・醉本「當報你」、綴本「當報伊」

註 ○貌美——「貌容」の意。『小孫屠』第三出「剔銀燈」に「香醜

路遠人沽飲、嬌貌美風流斯稱、同第八出「迎仙客」第四曲に「我娘子、果嬌媚、幸遇官人俊貌美」とある。○生禮（理）なりわい、の意。（宋元）参照。○你家住在那裏、未知你名姓誰

——ここは元來九字句だが、「裏」で韻を踏む。第二曲の「我雙親幼失、異日無靠倚」も同様に「失（入聲）」で押韻すると思われる。○務農——農業をする、の意。『國語』『周語上』に「三時務農而一時講武」とある。○田地——普通は「地方」の意だが、

ここは「地里」の意。○沙陀小里——劉知遠諸宮調「第一」に「此人在沙陀小李村住、姓李名洪義、爲無頼、只呼做活太歲」とあり、「里」は「李」に校訂すべきかもしれないが、「大小里分」

「大里」「小里」等の語が散見されるのでこのままとした。なお愈本は「村里」に校訂する。○（姓）（字）知遠劉家嫡（業）（子）——「姓」「業」兩字は、諸本によって改めた。○異日——ここでは、過去の意と解釋した。○（牧）（收）留（去）（取）——「去」を諸本は「取」に作る。「去」は「取」の音通による借字。

○結草啣環——恩に報いる、の意。「結草」は「春秋左氏傳」「宣公十五年」に、「啣環」は『續齊諧記』（『後漢書』卷五四）「楊震傳」李賢註所引）に基づく。○年作——「雇工」の意。（漢）参照。

○不爭——「不相差」の意。楊萬里「食菱」詩に「鸚頭吾弟藕吾兄、頭角嶄然也不爭」とあり、辛棄疾「江神子（一川松竹任橫斜）」詞に

「比着桃源溪上路、風景好、不爭些」とある。（宋元）参照。

○大兒子李弘——李弘は李洪義のこと。清・翟灝「通俗編」卷

二〇に李洪義についての考證がある。李洪義は通俗文學ではしばしば李弘一と書かれるため、ここでは校訂しなかった。李三娘には李洪信（長子）・李洪義（次子）の二人の兄がいたことになっているが、李洪義を李弘一と誤ることによって順番が逆轉したのである。○主張——自主的にとりかはらう、の意。（宋元）参照。

○（外白）——文脈上補った。○（詩曰）——以下の四句は押韻しており、退場時と考えられるため、補った。○隄防（仁）（人）不（人）（仁）——成化本第三〇葉aに「莫信直中直、隄防（仁）（人）不（人）（仁）」（剛直のみが人を不仁から守る手立てと思ふな）とあり、また『渾池會』第一折に「莫使直中直、提防人不仁」とある。「莫信（使）直中直、隄防人不仁」の二句で成語。ただし、ここでは成語としての通常の意味とは異なった使い方がされている。○

今日得公提（奪）（撥）起免交人在汚泥中——成語。錢南楊校註本『永樂大典戲文三種校註・張協狀元』第二二出にも「今日得君提撥起、免教身在汚泥中」の句があり、その註においても「白兔記」を引きつつ考證している。○汚泥中——「中」はこの場合「貧」「人」とで韻を踏んでおり、眞文韻と東同韻が通押しているものと考えられる。

譯

9「好姐姐（阿のうた）お前を見れば、堂堂たる容貌。どうして生計をはからないのだ。おまえの家はどこだ。名はなんというのだろう。心配するな、農作業ができ田畑を耕

することができるとならば、おまえを家に連れて歸って挨拶してやってもいい。[注のう]

10 [前腔] わたくしはもとより、沙陀村の者。字を知遠と申す劉家の嫡子。ふた親を幼くして亡くし、それから寄る邊ない身であります。お救いください。もし旦那さまのところへ引き取っていただいたなら、ご恩に必ずや報いましょう。

[外のセリ] 若者よ、それならば、我が家には小作人が三三百人は居るから、お前一人の飯くらい大差ない。

お前が朝晩おとなしく農業に勤めるなら、ついて来なさい。[注のセリ] もし旦那様が救って下さるのなら、深く感謝いたします。[外のセリ] もうひとつお前に言っておくと、我が家には上の息子李弘一がいる。酒癖がちよつと悪いが、朝晩彼の言うとおりにしていればいい。[注のセリ] 旦那さまが心配しておられることは、全て旦那さまのお取り計らい通りにいたします。[外のセリ] それならば一緒にゆこう。

[詩に回] 富貴を求めずに貧乏に甘んじるが良い。昔から言われるようにそうすれば不仁から身を守る事が出来る。[注のセリ] 今日旦那さまのお引き立てを受け、泥の中からは出る事と相成りました。[退場]

第四出 [貼] [同前]、且、[外] [同前]、生

[貼上]

1 [梁州令] 孩兒美貌本天顔。似洛浦神仙。[唱] 願天得遇好姻縁。逢媒事〔氏〕、〔澤〕 〔擇〕 良夕〔婿〕、做姻眷。

[副] 孩兒、自從你爹爹在馬鳴王廟中賽願回來、被廟

官斗〔叫〕回去了。這早晚不見回還。我和你娘兒兩箇

莊前莊後接取一遭。孩兒、你看、莊前莊後牧羊、

村北村南稻滿場。[唱] 母親、家有團糧〔大〕 〔大〕飽、

戸無〔搖〕 〔搖〕 役子孫安。

[副] 天田、干寒韻。

[校記] 汲本、始譜。○ [梁州令] 汲本「七娘子」、始譜「梁州令」

○「美貌本天顔」汲本「美貌體天然」、始譜「貌本天然」

○「似洛浦神仙」汲本「似洛補神仙、荏苒芳年」○「願天得

遇好姻縁。逢媒事、澤良夕、做姻眷」汲本「凜烈寒風垂幕、喜得

晴明天氣」、始譜「願天得遇好姻縁。憑媒氏、逢佳婿、做姻眷」

[注] ○ [梁州令] 汲本は「七娘子」とする。ここでは始譜に従い、

句格を切った。○天顔「天顔」は、普通は「尊顔」の意で、

「天韻」の意にはならない。しかも「顔」は干寒韻だから「顔」

がなければ天田韻のみの押韻となる、諸本に従って「然」に校

訂した方がよいかもしれない。 ○逢媒(事)(氏)(澤)(釋)良

(夕)(婿)―始譜本文の意に従って校訂した。「夕」は入聲字だが「婿」としばしば通用される。なお、ここで且が積極的に春心をうたうのは、一般の才子佳人劇の類型からみて例外的で興味深い。 ○接取一遭―「取」は「去」の音通字かもしれないが、敢えて校訂しなかった。「一遭」は「二下」の意。 ○莊前莊

後牧牛羊……戸無筵(篠)役子孫安―「羊」「場」「安」で押韻する韻文。ただし、汲本では「安」を「康」とする。

譯

貼目が登場してうたう

1【梁州令】うちの娘の美貌は生まれつき、かの洛水の女神様のよう。【田のうた】神様がよい縁談に巡りあわせて下されば、仲人をたて、良いお婿さんを選び、結婚するのに。

【田のセリ】むすめや、お父さんはお参りに行つての歸りしな、宮司さんに呼び戻され、今時分になつてもまだ歸つてきません。おまえと親子二人で村のその邊まで迎えに行きましょう。むすめや、こらん。村のあちこちに牛や羊が放牧され、そこそこに稻がいっぱい実っていますよ。【田のセリ】お母さん、家には澤山の穀物が蓄えられ、犬や鶏までがお腹いっぱいです。家には賦役もなく、子孫は安泰です。

附

2【尾犯序】村落少人煙。橫堂(塘)水煖。玉(路)(鷺)如拳。喜有野梅開遍。時有香(川)(傳)。採山花斜插在鬢邊。茅(簷)(簷)下、見盹睡父老歡笑(赴青年)(負晴暄)。【外(同生上)】附

3【遇帖(賺)】才貌雙全。見他身狼狽(有)(又)饑寒。婆婆我領歸來、你好行方便。附 聽奴言。我與他人不面(擅)

【善】。面可疑、不知何州並那縣。只恐恩多翻成(願)(怨)。

附

4【換頭】你怎出語好難見。見我身狼狽又饑寒。婆婆休疑我、分明咫尺家不遠。附 你莫埋冤。【莫】埋冤。口食身衣前世緣。且留在家中聽使喚。附 吓你休強言。休強言。守閨女不當你占先。附 罷罷奴自去工針線。附 休強

5【纏枝花】你休得把人相輕賤。此漢身康健。春種秋收休辭憚。自然不用愁衣飯。附 同(外)色(計)(記)得買臣未

遇(桃)(挑)薪賣、後來發跡何難。附

6【前腔】公公(計)(既)然行方便。何須苦勞心(口)(執)見。漢子只怕你命乖福分淺。在我家里不長遠。附 附 附

7【前腔】上告公公見憐。(在)(再)告婆婆見憐。這恩(得)(德)明(銘)心在肺腑。

附 若得大公收留在宅上、大凡事必須向前。附 附

8【尾聲】恩(得)(德)大、敢(非)(容)(薄)淺。取出青蚨數貫。

錢把與他人做雇錢。〔外云〕語曰

困不須平論不須訝。困且自寬心度歲華。困不戀故鄉生處好。困受恩深處便爲家。〔並下〕

韻 天田、干寒、歡桓韻。「心」「脯」は失韻。

校記 2—汲本、始譜。○「橫堂」汲本「見橫塘」、始譜「橫塘」。○「媛」始譜「淺」。○「玉路如拳」汲本「宿鷺如拳」、始譜「玉鷺聯拳」。○「喜有」諸本「喜」。○「時有香川」汲本「時有香傳。消遣。飲香醪時煨芋栗」、始譜「時有香傳。消遣。飲村醪時煨芋栗」。○「插在」諸本「插」。○「鬢邊」汲本「鬢邊」。

○「詹」諸本「簷」。○「盹睡」汲本「瞋睡」。始譜「龍鍾」。○「歡」始譜「飲」。○「赴青年」汲本「舞晴暄」、始譜「負晴暄」。

3、4—汲本、始譜、成譜。○「遇帖」汲本「入賺」、始譜「婆羅門賺」、成譜「纏花賺」。○「雙」諸本「兼」。○「見他」汲本「成譜」「見你」。○「有」諸本「又」。○「婆婆我領」汲本「太婆是我領」、始譜「成譜」「是我領」。○「你好」汲本「成譜」「好生與我」、始譜「你好生與我」。○「奴言」諸本「伊言」。○「擅」諸本「善」。○「面可疑、不知」諸本「未知他家住」。○「只恐恩多翻成願」汲本「恩多又恐番成怨」、始譜「恩多猶恐番成怨」、成譜「恩多又恐翻成怨」。○「你怎出語好難見」汲本「始譜」「婆婆出語何難見」、成譜「出語難見。出語難見」。

○「見我身」諸本「公公見我身」。○「婆婆休疑我」諸本「休疑我」。○「你莫埋冤。埋冤」汲本「成譜」「莫埋冤」、始譜「莫埋冤」。○「前」諸本「宿」。○「且」汲本「母親」、成譜、無。○「任你休強言。休強言」汲本「成譜」「休強言」、始譜「你休強言」。○「你占先」汲本「成譜」「汝占先」、始譜「占先」。○「罷罷奴自去工針線」汲本「成譜」「奴自歸房拈針線。再難相勸。再難相勸」、始譜「奴自歸房拈針線。再難相勸」。

5—汲本、始譜、成譜、欽譜、增譜、新譜、京譜。○「纏枝花」諸本「纏枝花」。○「人」諸本「他」。○「康」諸本「強」。○「憚」諸本「倦」。○「自然不用愁衣飯」始譜「成譜」「欽譜·增譜·新譜·京譜」「自然不用愁衣飯。只愁他、福分淺。枉了行方便」。○「計得」汲本「始譜·成譜·欽譜·增譜·新譜」「記得」、京譜、無。○「桃」諸本「挑」。

6—汲本。○「前腔」汲本「前腔」。○「計然」汲本「既要」。○「何須苦勞心只見」汲本「何勞我心多執見」。○「你」汲本「他」。○「里」汲本「中」。○「長」汲本「常」。

7—汲本、始譜、成譜。○「前腔」汲本「前腔」、始譜「賀新郎衰」、成譜「纏枝花」。○「在告婆婆見憐」諸本「再告婆婆聽言」。○「恩得明心在肺腑」汲本「成譜」「恩德銘心鏤肝」、始譜「恩德銘心肺腑」。○「若得大公收留在宅上」汲本「成譜」「若是收留在宅上」、始譜、無。○「必須」諸本「自當」。

○「莫埋冤。埋冤」汲本「成譜」「莫埋冤」、始譜「莫埋冤」。○「前」諸本「宿」。○「且」汲本「母親」、成譜、無。○「任你休強言。休強言」汲本「成譜」「休強言」、始譜「你休強言」。○「你占先」汲本「成譜」「汝占先」、始譜「占先」。○「罷罷奴自去工針線」汲本「成譜」「奴自歸房拈針線。再難相勸。再難相勸」、始譜「奴自歸房拈針線。再難相勸」。

5—汲本、始譜、成譜、欽譜、增譜、新譜、京譜。○「纏枝花」諸本「纏枝花」。○「人」諸本「他」。○「康」諸本「強」。○「憚」諸本「倦」。○「自然不用愁衣飯」始譜「成譜」「欽譜·增譜·新譜·京譜」「自然不用愁衣飯。只愁他、福分淺。枉了行方便」。○「計得」汲本「始譜·成譜·欽譜·增譜·新譜」「記得」、京譜、無。○「桃」諸本「挑」。

6—汲本。○「前腔」汲本「前腔」。○「計然」汲本「既要」。○「何須苦勞心只見」汲本「何勞我心多執見」。○「你」汲本「他」。○「里」汲本「中」。○「長」汲本「常」。

8—汲本。 ○「恩得大、敢非容淺」汲本「這恩德緣非淺」

○「取出青蚨數貫」汲本「老旦 取去青蚨數貫。 ㊦ 要青蚨何幹」

○「錢把與他人做雇錢」汲本「老旦 留與他人作雇錢。 ㊦ 大婆這漢子不是受雇之人」

【註】○「尾犯序」—「尾犯序」から「尾聲」までは韻脚を同じくし、套敷を成していると思われる。曲譜類が「賺」「纏枝花」「尾聲」を南呂宮とし、「尾犯序」を中呂宮とするのは明末以後の宮調に従ったものであろう。またこの曲には、格律から見て「時香傳」の後に二句の脱落があると思われる、諸本にはその二句が補われている。校記参照。

○(玉路)「鷺」如拳—末・鄧椿「畫繼」卷一に「野水人の渡る無く、孤舟盡日横たわる」の畫題を論じて「空舟岸側に繋がる、拳鷺 舷間にあり、棲鴉 蓬背にあり」といい、また『百家公案』卷一は包拯の顔の眉間の皺を描寫して「面生三拳」という。「拳」はこかしを突き上げた形全體をいう。 ○(赴青年)「負晴暄」—このままでは意味が通りにくいので、始譜に従って校訂した。

○(外同生上)—汲本に従って補った。 ○(遇帖)「賺」—汲本は「入賺」、始譜は「婆羅門賺」、成譜は「纏枝花」とする。「遇帖」は、この二字では字義を成さないので誤りを含むと思われるが、校訂する決め手に缺く。「賺」であることは明らかであるから、今は假に「賺」とする。なお、成譜と始譜とでは「換頭」の位置を異にするが、ここでは始譜の格律に従った。 ○面可疑—人相が悪い、の意。本曲の格律がよくわからないので、ここ

では一應増句として扱った。 ○恩多翻成(願)「怨」—成語。人

に與える恩が深すぎると却って怨まれる結果になる、の意。唐・王士源「元倉子」「用道篇」に「恩甚則怨生、愛多則憎至」とあり、『漁樵記』第四折「太平令」に「明明的這關節有何難見、險些把一家兒恩多成怨」とある。なお、ここでの貼旦のうたは生をいふかしんでおり、一般の才子佳人劇に登場する「婆娑」の類型と異なる點が興味深い。

○你怎出語好難見—生が貼旦を「你」と呼びかけるのは不自然であり、「你怎」の二字を、諸本に従い「婆娑」に校訂すべきかもしれない。「難見」は、わからない、の意と解した。 ○分明咫尺家不遠—「分明」は一種の吏牘語で、身元がはっきりしている、という意に解した。 ○你莫埋

冤「莫」埋冤—二つ目の「埋冤」二字は原文ではおどろき字であるが、文意にしたがって、おどろき字を一つ付け加えた。 ○(纏枝花)—

一曲牌名の表示がないので、諸本に従って補った。ただし、以下の三曲が「纏枝花」とすれば、各曲ともそれぞれ二句が脱落していることになり、しかも第三曲目の格律が前二曲のそれと必ずしも一致せず、問題が残る。二句の脱落については、汲本以外の諸本は「只愁他、福分淺、枉了行方便」とするが、ここでは敢えて補わなかった。 ○(生同外合唱)—二曲目に「合唱」とあるので、

ここでは生と外が一緒に唱うべきである。 ○買臣—漢の朱買臣。貧乏であったが後に會稽の太守となるに及んだ故事(『漢書』卷六四上「朱買臣傳」)があり、『漁樵記』はこの話を扱って

る。○〔二前腔〕〔四圍〕曲牌名について、始譜は「賀新郎衰」とする。本曲の格律は「纏枝花」のそれと必ずしも一致せず、一句目は一字足りず、三句目は失韻と思われるが、ここでは汲本・成譜に従って「纏枝花」とした。また「若得大公收留在宅上」はここには入れゼリフとして扱った。なお、成譜は、始譜が「賀新郎衰」とすることを、汲本を根據に難じている。○〔合韻〕—この曲を

「纏枝花」とするならば、汲本に従って合唱を補うべきである。○敢非〔容〕〔薄〕淺—「容」は衍字とすることもできる。なお、汲本は「尾聲」全體を外と老旦の掛け合いにしているが、ここでは従わない。○不戀故郷生處好受恩深處便爲家—成語。「不戀」

を「休戀」に作る同様の表現が『張協狀元』第一大出退場詩や『小孫屠』第九出にも見られる。○〔並下〕—第四出の終わりであるため、汲本に従って補った。

〔譯〕
〔點目のうた〕

2【尾犯序】村は人家の煙もまばら、池の水はあたたかく、玉のように真っ白な鷺が拳のように顔を出している。嬉ししいことに野邊の梅が花を咲かせ、風に乗って時に香りが傳わってくる。山の花を採ってきては髪に挿す。見れば茅葺きの軒下には、年寄りが居眠りしながら幸せそうにひなたぼっこをしている。外、生とともに登場 外、のうた

3【賺】才智容貌ともに優れながら、見れば彼は困窮して

餓えに苦しんでいる。婆さんや連れて歸ってきたから、すっかり便宜をはかって助けてあげてくれ。〔點目のうた〕わたしが言うのをおききなさい。彼の顔には見覚えがない。人相も悪いし、どこの馬の骨ともわからない。恩が却ってあだとなるのが心配です。〔生のうた〕

4【換頭】どうしてあなたはわからないことを言うのです。よ。わたしの困窮ぶりと餓えや寒さに苦しんでいるの見てください。奥さまがめだてしないで下さい。わたしの身元ははっきりしているし家はすぐ近くにあります。〔目のうた〕恨みことを言わないで、恨みことを言わないで。

着るもの食べものは前世の縁。しばらく家に留まって雇い人となりなさい。〔點目のうた〕ちっ口出しはやめなさい。口出しはやめなさい。年頃の娘が出しゃばるとははしたない。〔目のうた〕仕方がないのでわたしは針仕事をしに行くとします。〔退場〕外、のうた

5【纏枝花】婆さんや人を軽んじ侮るのはやめなさい。この男は丈夫な身體をしておる。男よ春の種蒔き秋の收穫を嫌がるでないぞ。さすれば自然とお前の食い扶持も出てくるというものだ。〔生と外の合韻〕漢の買臣でさえ運が向く前は新を擔いで賣っていた。後に出世するのに何の困難がある。〔點目のうた〕

6【前腔】あなたが助けたいと仰るならば、煩い考えいこ

じになることもありませんまい。男よおまえは運拙く福分の無さそうな顔、我が家では長續きしないでしようよ。〔合〕
唄 前に同じ 〔生のうた〕

7【前腔】旦那さまに申し上げますどうぞお憐れみ下さい。奥さまに申し上げますどうかお憐れみ下さい。このご恩は胸に刻み肺腑に刻み込みましょう。

〔入れゼリフ〕もし旦那さまがお宅に置いて下さるのなら、

何事も全て御前にて然るべく。〔合〕唄、前に同じ 〔外のうた〕

8【尾聲】恩は大きいぞ、浅くはないぞ。取り出したるは銅錢數貫。これをやつに與えて雇い料としよう。〔外のセリ〕

〔詩に曰く〕

〔外のセリフ〕あれこれ言うな怪しむな。〔旦那のセリフ〕しばらくは心を寛く持つて年月を過ごしましょう。〔生のセリフ〕生まれ故郷だけが良い所だと戀しがるな。〔旦那の深い恩を受けた處〕こそわが家なのだから。〔同退場する〕

第五出 (生、外〔同前〕、撞主兒、旦那、淨〔季弘一〕)

1【夜行船】〔匡〕受苦度年時。無煩惱無是非。三盃社酒權遣〔消〕遣、牧羊放馬轉過疎籬。

〔匡〕一飲一酌、莫非前定。前日多蒙李大公在馬鳴王廟中收緣〔錄〕、我劉知遠來家、着我務農耕田、俱〔以〕〔也〕不會、止只會牧放些牛馬。他家一疋青驃白馬、數年無人騎〔義〕〔乘〕、近他不得、被我劉知遠一降一伏、降的綿羊相似。大公十分欣喜、早晨間與了〔己〕〔幾〕盃酒喫、不覺的醉將上來了。我思想起來、牛肚〔以〕〔己〕飽了、馬草也都有了、不免去兀的那裏替蓬上睡一覺。待我醒來〔在〕〔再〕作道禮〔理〕。

韻 支思、機微韻。

〔校記〕汲本。○〔夜行船〕汲本〔似娘兒〕 ○〔苦〕汲本〔雇〕

○〔社〕汲本〔濁〕 ○〔權〕汲本〔堪〕 ○〔遣〕汲本〔消〕

〔註〕○〔夜行船〕〔夜行船〕でも〔似娘兒〕でも格律には合わないが、詞牌〔夜行船〕の前関の形に比較的似ているため改めなかった。○社酒―土地神を中心とする地域の共同體を「社」とい

い、その祭祀(「社會」の際に振舞われる酒を「社酒」という。○一飲一酌莫非前定―成語。「一飲一酌」は「一啜一飲」「一飲一啜」とも作り、『莊子』「養生主」にある「澤雉は十歩に一啜し、百歩に一飲するも、樊(か)の中に畜やしなわゆるを斬もとめず。神は王(さ)かんなりと雖も善(た)のしまさればなり」に基づく。○俱〔以〕〔也〕不會―第五出の後半にも「叫他務農耕田、俱也不會」の表現があり、いま假にこれに従って「以」を「也」

に改めた。「以」は常識的には「已」に校訂すべきであり、また現に「俱已」は常見される表現である。ただしこの部分では、「俱已不會」では漢語として不自然な表現であると思われ、あえて「已」にはしなかった。○騎義「乘」―「義」は明らかに誤りのため、假に改めた。○兀的那裏―「兀那」の意、あそこ。(匪参照。なお、「兀的」「那裏」「兀那」とも同じ意味であり、「兀的那裏」と同じ意味の語を二度重ねるのは、あまり見ない表現のように思われる。

譯

1【夜行船】生のうた つらい日々を過してはおりませんが、惱み怒りや争いもありません。少しばかりの村祭りの酒を飲んでしばらくは氣晴らしでもしましょう。羊や馬を放牧しながら垣根を曲がっていきます。

生のセリフ 酒の一杯一杯も運命に違いありません。先日は李の旦那さまのおかげをもちまして、馬明王廟で拾っていただき、わたくし劉知遠を家の者とし、野良仕事をさせましたが、私は何もできず、ただ牛馬の放牧ができるだけです。屋敷にいる、たてがみが灰色の白馬は、數年來人が乗れず、誰も近付けませんでしたが、わたくし劉知遠にすっかり手なづけられて、綿羊のようにおとなしくなつてしましました。旦那さまはとても喜び、朝から何杯か酒を下さ

つたので飲みましたら、圖らずも酔いが回つてきました。ああそうだ、牛も腹一杯になっており、馬も馬草がたっぷりあるので、あそこの枯れ草のところへ行つてひと眠りいたしましょう。目が覺めてからまた考えるといたします。

外上白 踏破鐵鞋無覓處。算來全不用工夫。投老夫馬

鳴王廟中收得劉知遠。日家二(二)他務農耕田、俱(以)

〔也〕不會、止只會牧放牛馬。我家一疋劣馬、被他一

降一伏。早晨與他(已)(幾)盃酒喫。這早不見回還。我

去莊前狂後。米麥都收了。雷響。敢要下雨也。圖王

大公差了。臘月家間、怎生發雷。因咬、你說的是也。

冬行春令、來年必有災病。外圖

2【下山虎】(小桃紅)臘天不雨、喜在莊農。(罷)(愛)(日)喧情(喧晴)晝、也、轉過疎籬霧籠(允)(統)。(急)(極)目看

西東。四下里影無蹤。斷人(口)。我只聽的、雷聲動、也、

願天公另行冬。

回老夫觀看觀看、呀呀、蒿蓬上火起了。想必是小的

每向火不仔細、惹起這火來了。老夫不免上前救一救。

吓吓、不是火、元來是一箇人。圖

3【下山虎】見一人高臥、倒在蒿蓬。鼻息如雷吼、振氣似虹。我把老眼摸、索認他貌容。呀元是霸業圖王(且)(擔)

雄。更有蛇串七竅。(中)〔終〕須後龍。振動山河魚化龍。

〔回〕呀呀呀，元來是劉知遠。老夫不免叫醒他。劉知遠，劉知遠。呀，見一條五花蛇兒在他七竅中出來入去。

常言道，蛇串五竅五霸諸侯，蛇串七竅(六)〔大〕貴人也。老夫家中有小女小字三娘，未曾許聘他人。趁此漢未發跡之時，老夫招他爲婿。久後發(別)〔跡〕之時，老夫接他不迎。中間只沒有主親的。老夫眉頭一縱，計上心來。前村有我兄弟李三公，不免央他爲媒。老夫走一遭。〔外〕唱

4 〔變牌令〕急急去報三公報三公。

〔回上〕見怪是怪，其怪則害。〔外〕唱

呀呀呀女孩(此)〔兒〕因甚出閨門。〔回〕唱

怪哉後怪哉後真箇怪哉。

〔外〕見甚麼。〔回〕唱

見五色蛇兒墜。

〔外〕甚麼顏色。〔回〕唱

(素)〔紫〕青紅。

〔外〕那裏去了。〔回〕唱

一步步趕來後趕來後影也無蹤。

〔外〕孩兒，閨門之內因何到此後花園中。〔回〕奴家花繡閣之中，繡作女工生活，則見那天窗上吊下五花蛇兒來，在奴奴面前左蹺右轉，被奴家緊走緊趕，慢趕

慢行，不趕不走。趕到此間，就不見了。〔外〕孩兒，你要見這蛇兒不見。〔回〕奴家要見。〔外〕真箇要見。見了，休害怕。孩兒，這不是。〔回〕

見了後見了後此心驚。料莫是妖精。把他纏(定)。〔外〕(女)孩兒，休得氣沖沖。大貴人蛇串七竅中。一朝運通。九宵(霄)氣沖。異日(喧)〔軒〕昂，他把妻子來討。

〔外〕孩兒，蛇串五竅，五霸諸侯。蛇串七竅，大貴人也。趁他未發之時，招他爲婿。這事天知地知你知我知。切莫交外人知。

〔回〕爹爹若交外人知。〔外〕孩兒走漏這消息。畫虎(木)〔未〕成君莫笑，安排牙爪使(京)〔驚〕人。〔並下〕

〔回〕東同，眞文，庚亭韻。「畫」は失韻。

〔校記〕 2 汲本，始譜，成譜。○〔下山虎〕諸本〔小桃紅〕。○

「竊」諸本「愛」。○「喧情」諸本「喧晴」。○「霧籠充」

汲本「步龍鐘」。始譜・成譜「步龍鐘」。○「急目看」汲本・

成譜「極目看」。始譜「極目的望」。○「影無蹤。斷人」汲本・

成譜「影無蹤」。始譜「影無窮。斷人蹤」。○「我只聽的」諸

本「只聽得」。○「願天公另行冬」汲本・始譜「莫不是老倒

無能。怨天公令自行冬」。成譜「莫不是老倒無能怨天公。怨天公

令自行冬」

3 汲本。○〔下山虎〕汲本〔下山虎〕。○「見一人高臥」汲

本「見一人高臥、見一人高臥」 ○「吼」汲本「振也」 ○
「振氣似」汲本「氣如吐」 ○「老眼摸」汲本「兩眼摩挲」
○「索認」汲本「覷」 ○「三元」汲本「元來」 ○「旦」汲
本「大」 ○「蛇串七竅、中須後籠」汲本「蛇穿竅、定須顯榮」
4—汲本、始譜、成譜。 ○「鬪牌令」汲本「鬪牌令犯」、始譜「黑
鬪牌」、成譜「鬪牌令集」 ○「報三公報三公」諸本「報三公」
○「呀呀呀女孩此因甚出閨門」汲本・始譜「女孩兒因甚出閨門」、
成譜「女孩兒因甚出閨中」 ○「怪哉後怪哉後真箇怪哉」汲本
「怪哉怪哉真怪哉」、始譜「怪哉怪哉」、成譜、無 ○「素」汲
本・成譜「紫」 ○「二步步趕來後趕來後」諸本「一步步趕來
後」 ○「見了後見了後此心驚」汲本「見着後見着後使奴心驚」、
始譜「見着後使奴心恐」、成譜「見着後使奴驚恐」 ○「料莫」
諸本「莫不」 ○「纏」汲本・始譜「纏定」、成譜「纏弄」
○「孩兒」汲本・成譜「女孩兒」 ○「六貴人」成譜「大貴之
人」 ○「串」諸本「穿」 ○「氣」成譜「志氣」 ○「異
日喧昂」汲本・始譜「異日軒昂」、成譜「異日軒昂、異日軒昂」
○「他把妻子」諸本「把妻子」
註 ○踏破鐵鞋無覓處算來全不用工夫—成語。二句目の「算來」
は「得來」ともいう。 ○投—「投至」「比及」の意。 ○
「日家」—「家」は時間副詞を作る助詞。「臘月家間」も同様で、
「家」間」ともに時間副詞をつくる助詞。二音節化する際には
「家間」となる。 ○(一)(一)「叫」—「叫」は原文では訛字。文意

により改めた。 ○這早—「這早晚」の意。 ○撞王兒—下
働きの者の名。「撞」は「莽撞(粗忽者)」の意。脚色としては「丑」
とすべきかもしれない。 ○(下山虎)「小桃紅」—諸本に従う。
【下山虎】「小桃紅」【鬪牌令】は屢々套數としてセットで用いられ
る。第三曲は原文では曲牌の表示がなく、また、句數も若干足り
ないが、【下山虎】と假に見なした。本曲では、始譜に従って句格
を切り、「斷人」の下に一字の脱落があると見なして空格を補っ
た。また「雷聲動也」の下にも一句の脱落があると思われる。
○(鶻)「愛日(喧情)喧晴」書也—「愛日」は、冬の日、の意。「春
秋左氏傳」「文公七年」に見える「趙衰冬日之日也」の杜預註に
「冬日可愛」とある。また、「也」は「也麼哥」等と同様、【小桃
紅】に特徴的な一種のはやしことば。始譜は、この「也」の前で
必ず押韻すべきことをいう。したがって「晝」は失韻。 ○小
的每—「小的每」は召使いをさしている語。(宋元)參照。「每」
は貶意を含む。 ○(下山虎)—汲本に従って補った。前曲の
註も參照。ただし、「呀元是鬪業圖王—擔雄」句の下、二句の誤
脱があると格律上からは考えられる。 ○(旦)「擔雄—」
擔英雄」の意と解して校訂した。第二出1【獅子序】の註參照。
○蛇串七竅—『舊五代史』卷二〇「周書」(一一)「后妃列傳」
(一)は、後周太祖郭威(雀兒)についての妻・柴氏の目撃談として
「太祖嘗て寝ぬるに、后五色の小蛇の額鼻の間に入るを見て、
心に之を異とし、其の必ず貴とならんことを知り、敬奉すること

愈いよ厚し」という。この郭威と柴氏の逸話についても、劉知遠と李三娘と同様、通俗文學の重要な素材となっている。「串」は「穿」の意。以下同じ。○眉頭一縦計上心來一常語。○

【蠻牌令】—本曲は曲譜類の格律と合わない。なお、始譜は「怪哉後怪哉後眞箇怪哉」の句(始譜では「怪哉怪哉」と)料莫是妖精。把他纏定」の句(始譜では「莫不是妖精。把他纏定」)を、ともに入たではなくセリフとする。その按語に「按ずるに、此れ劉智遠の古本なり。其の第二句の下に『怪哉怪哉』の四字有り、及び第六句(成化本では第七句)の下の『莫不是妖精把他纏定』の句は、皆な寶白に係る。今人、皆な以て其れ曲中に列在してこれを唱う。獨り思わざらんや、【蠻牌令】調中に何ぞ此の二句の句法有るかを」と言う。○報三公報三公—二つ目の「報三公」三字はおどりの字。格律上必要ないため、衍字である可能性が高い。○見怪

是怪其怪則害—一種の成語で、普通は「見怪不怪、其怪自壞(怪異を見ても怪異と思わなければ、その恐ろしさは自然に消滅する)」というだろう。唐・孫思邈『備急千金要方』卷二七「養性序第一」、宋・普濟『五燈會元』卷一八「法輪齊添禪師」、同卷二〇「竹原宗元菴主」等参照。ただしこの部分は、「見怪是怪、其怪則害」のままでも意味が通じるので、あえて改めなかった。「則」は「做」の一聲の轉。○怪哉後怪哉後—二つ目の「怪哉後」三字はおどりの字。格律上必要ないため、衍字である可能性が高い。なお、「後」は「呵」の一聲の轉。○(素)紫青紅—「素青

紅」でも意味は形成しうるが、「紫青紅」とするのが妥當である。○赶来後赶来後—底本では、二つ目の「赶来後」三字はおどりの字。これも格律上必要ないため、衍字である可能性が高い。○奴家—女性の自稱。後文にいう「奴奴」も同様。

○花繡閣—「繡閣」と同意。女性の部屋的美稱。○生活—仕事、の意。○驚—庚亭韻であるが、東同韻と通押させていると見るべきだろう。○料莫是妖精把他纏定—汲本等に従って「定」を補う。この部分を始譜はセリフとする。「精」「定」は庚亭韻であるが、東同韻と通押させていると見るべきだろう。

○(乞)孩兒—格律に従い補った。○天知地知你知我知—『後漢紀』卷一七に見える楊震のことは踏まえる。もとは「君知我知天知地知」という。これを踏まえて『蒙求』題では「震畏四知」という。○爹爹若交外人知……以下四句は、外と旦の退場詩であり、第一・第二・第四句で本來押韻すべきであろう。

○畫虎木(末)成君莫笑……—一句は成語。『諺范叙』第四折の正末の登場詩、『西廂記』第五本第二折の末の登場詩等にも見える。

〔譯〕
外が登場してセリフを言う。「鐵の靴に穴があくほど探し求めたものも、手に入れてみれば意外に簡單なもの」と申します。わしが馬明王廟で劉知遠を引き取って

以來、晝間は農作業をさせましたが、彼はどれでもできず、できるのはただ牛馬の放牧だけ。我家の氣性

の荒い馬は、彼に手なずけられてしまいました。朝、彼に數杯の酒を與えたところ、いまだ歸つてまいりません。村のその邊に出てみましょう。穀物はみな收穫されています。おや雷だ。じき雨が降るに違いない。粗忽な王豆 旦那様、違いますよ。十二月の時分にどうして雷が鳴りましょうや。外のセリフ おお、お前の言う通りだ。冬が春のようにあたたかいと、來年は必ず災いが起こると言うからな。外のうた

2【小桃紅】十二月に雨が降らないのは、農家にとつては喜び。冬の太陽のあたたかな晝、ヤー、まばらな垣根を曲がって通り過ぎていくとあたりは霧でけふる。周りを見回すと、邊り一面人影もない。人影もなく、聞けば、雷の音が響く。ヤー、神様よ冬は冬らしくして欲しいものだ。

外のセリフ わしが見遣つてみると、おや、枯れ草のところで火が出ているぞ。きつと、小者どもが不注意で火を出してしまつたんだらう。消しに行くとしよう。ちつ、火ではなく、なんと人であつたか。外のう

3【下山虎】見れば枯れ草のなかに、高枕で寝ているやつがいる。鼻息はまるで雷鳴、氣は大地を虹蜺のごとく振るわせている。わしはこの老眼をこすつて、やつつの顔を

確かめてやろう。いやなんと覇業をなしとげ王たるをねらう堂々たる英雄であつたか。さらにそのうえ蛇が七つの穴を出入りするからには、將來きつと出世して、山河を振るわせ魚から龍へと變化するにちがいない。

外のセリフ おお、なんと劉知遠であつたか。彼を起こすとしよう。劉知遠、劉知遠。やや、見れば、五色の蛇が彼の七つの穴を出入りする。ことわざにも言うように、蛇が五つの穴を穿てば覇者や諸侯となり、蛇が七つの穴を穿てば大貴人となるとか。わしの家に幼名を三娘と言う娘がおるが、まだいいなずけがない。この男がまだ出世していないのに乗じて、わしが招いて入り婿にしてしまおう。しばらくたつて出世してからは、彼を家に迎え入れることはできない。ただ、間に立つて仲人をする者がいない。眉間にしわを寄せ少し考えれば、すぐにいい考えは浮かぶ。となり村に弟の李三公がおるが、あいつに頼んで仲人になつてもらおうとしよう。どれ、ひとつ走りしてくるか。外のうた

4【蠻牌令】大急ぎで李三公に報告に行こう報告に行こう。

目が登場してセリフを言う 「怪異を見て怪しめば、その怪異は自分に害を與える」というもの。外のうた

おやむすめよどうして部屋を出てきたのだ。[目]のうた
不思議ったら不思議よ本當に不思議だわ。

[外]のセリフ 何を見たのだ。[目]のうた

五色の蛇が落ちるのを見ました。

[外]のセリフ どんな色だ。[目]のうた

紫・青・紅のまだらです。

[外]のセリフ どこへ行った。[目]のうた

一足ごとに追いかけたら追いかけたら影も形もなくなつてしまいました。

[外]のセリフ むすめよ、部屋の中からどうして裏の花園にきているのだ。[目]のセリフ 私が部屋で針仕事をしていたら、天窓からまだらの蛇が落ちてきたのです。

私の前で行ったり来たりして、私が早く追いかければ早く逃げ、ゆっくり追いかければゆっくり行き、私が止まれば止まって、ここまで追いかけて来るといなくなつてしまいました。

[外]のセリフ お前はその蛇を見たいか。[目]のセリフ 見たいものです。[外]のセリフ 本當に見たいか。見ても怖がるんじゃないぞ。むすめよ、これじゃないか。[目]のうた

見てしまつたら見てしまつたらあなんとびっくり。妖怪が、彼に取り憑いているのではないでしょう。[外]のう

たむすめよ、慌てるんじゃない。大貴人は蛇が體の七つ

の穴に入るのだ。ある日突然運は開け、氣は天を突く。いつの日か出世して、妻を縣君夫人に封じるのだ。

[外]のセリフ むすめよ、蛇が體の五つの穴に出入りすれば、覇者や諸侯となり、蛇が體の七つの穴に出入りすれば、大貴人になるのだ。彼がまだ出世しないうちに、彼を入り婿にしよう。このことは天と地とわしとおまえだけが知っている。決して他人には教えるなよ。

[目]のセリフ おとうさまもし他の人に知られたならば、[外]のセリフ むすめやこの事を漏らしたならば、「虎を描いて出来上がらずとも笑うなかれ、牙と爪が備われば驚くこととなる」というもの。[どちらも退場する]